

この二人の騎士に祝福を！

蒼天 極

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

轢かれそうになった子供を助けて死亡した少年、天宮烈へアマミヤレツは異世界に転生する。

だが彼の仲間になったのは個性が豊かすぎる非常識人ばかりで……!?

彼はこの世界で無事に生き抜いていく事は出来るのか？

## 目次

### 第一章 ああ、駄女神さま

異世界へ行くことにした	1
魔力が異常に高かった	5
初陣　　くvsキャベツく	9
パーティー仲間が出来た	13
バーベキューを楽しんだ	16
リッチーと出会った	20
魔法について考えてみた	24
束の間の休日	29
デュラハンの呪い	33
命のための闘い　　くVSアンデッドナイトく	38
謝罪、そしてお説教	42
クエストを探した	47
新しいスキル	51
ナルシストを倒した。(カズマが)	55
怒りの鉄鎚　　くvsミツルギく	63

## 第一章 ああ、駄女神さま 異世界へ行くことにした

気がつけば白い空間の真ん中に設置された木の椅子に座っていた。漆黒を連想するほどに真っ黒い髪の毛に、ルビーのような赤い瞳。イケメンと分類されるほど整った顔たちは、これまでに何人もの女性を虜にしてきた。

そんな彼が目の前を見るとそこには、ゆつたりとした白い羽衣に身を包んだ、長い白銀の髪の毛の絶世の美少女が座っていた。

「天宮烈さん……。ようこそ、死後の世界へ。貴方は先程不幸にもお亡くなりになりました」

「……少し待って、今頭の中を整理する」

記憶を辿り、先程何があったのかを思い出す。

……なる程、

「これはまた、随分と格好良い終わり方をしたみたいだね」

「ええ、自らの命と引き換えに幼い命を救った。これは褒められる行いです」

道路に飛び出した子供を助けるために身代わりになった。

どうやら助けてあげることが出来たようだ、よかったよかった。

「まずは自己紹介を、私はエリス。魂を導く女神です」

「そうですか、よろしくお願いします」

女神様に深々と頭を下げる。

「貴方にはこれから三つの選択肢があります。一つ、全てを忘れて生まれ変わること」

これは嫌だ。

今までの嬉しかったことや悲しかったことを全てを忘れるなんて思うとゾツとする。

「二つ、天国へ行くこと。ですが天国とは永遠に何も無い世界、出来ることと言ったら天国行きを選択した魂と話すことしかありません」

それはもつと嫌だ。

何もなくなただ生きているだけなんて、死んでいる事と変わらない。  
……………いや、もう死んでるか。

「三つ、あなた方の世界で言うゲームの世界に記憶や姿をそのままに転移すること。ですが魔物や魔王の存在する世界です。今までにその選択をした方々も寿命を全う出来た人はほとんどいません」  
「詳しくお願いします」

エリス様によると本来エリス様の担当する世界は魔王という存在に脅かされているそうだ。

魔王軍に殺されてしまった人達がその世界に転載するのを嫌がってしまった為に人口が激減しているとのこと。

そこで若くして死んだ日本人を移民として送っているとのこと。

「それをお願いします」

「いいんですか、本当に危険な世界なんですよ？」

「いいんです。すぐに死ぬかも知れなくてもまたこの人生を生きられる、それだけで十分です」

そう応答するとエリス様は優しく微笑んで一冊の冊子を渡してきました。

「分かりました、では異世界へ持っていける特典を選んで下さい」  
「特典？」

「はい。あちらの世界に送る際には生存率の低さなどを考慮して、強力な武器または特殊な能力が一つ送られます」

へえ、親切的なシステムだなあ。

「ですが、あなたは死亡する直前に行った善行を評価されて特別に武器と能力を一つずつ選ぶことが出来ます」

おお！ 良い事はしておくもんだ。

早速冊子のページを捲る。

どれもこれも強力なのばかりだ。

「では、これとこれをお願いしますか？」

「はい、ですがいいんですか？ 能力はともかくこの剣は身体強化などの能力を付与されてませんか？」

「いいんです。生前は剣道をやっていたんでその技術を活かしてい

たいと思います」

何処からか現れた剣をエリス様に渡される。

少し重いが練習すれば満足に扱えるようになるだろう。

「ではあちらの世界に送ります。あなたの人生に幸あらんことを」

「はい、いろいろとありがとうございますございました！」

エリス様に頭を下げたのと同時に身体が浮遊感に包まれる。

そして天井の光へと吸い込まれていった。

気がつくとレンガの家が建ち並ぶ中世ヨーロッパを彷彿とさせる景色が目に入ってきた。

「すごい、これが……異世界！」

頬をつねってみると痛みがある、夢じゃ無いようだ。

確かこういう時はまずギルド？　と言うところで冒険者登録をするのが基本だつて知り合いが言つてた気がする。

そこで偶然近くを通りかかったエリス様と同じ髪の色をしたスレNDERな少女に声をかける。

「すみません。冒険者になりはこの街に来たんですけど、ギルドの場所を知ってますか？」

「君、冒険者になりに来たの？　いいよ。案内してあげる」

「ありがとうございます。あ、俺は天宮烈つて言います」

「アマミヤレッツ君だね？　私はクリス。見ての通り盗賊だよ」

クリスに案内されながらこの街を見渡す。

………本当に異世界に来たんだな。そしてもう日本の景色を見ることが出来ないのか。

つていかんいかん！　つついっいホームシックになつてしまうな。

これからこの世界で生きていくんだから昔の事は思い出しなしてしまおう。

「君はどこから来たの？」

「え？」

急にクリスにそう尋ねられて思わず口籠んでしまう。

異世界つて言ったら変な目で見られてしまうだろうし、日本で通じ

るかだろうか？

「秘密です」

「えー何それ」

クリスはブーたれる。

「……クリスさん」

「あはは。タメ語でいいし、呼び捨てで構わないよ」

「じゃあクリス。お前はなんで冒険者になったんだ？」

「うーん、秘密かな？」

「……さっきの仕返しってやつか？」

「そゆこと」

まあ、彼女にも秘密にしたい事はあるよな？

現に俺だって出身地を秘密にしたんだし。

そんな感じでクリスと他愛もない話をしながら街を歩いて行くと、

一段と大きな建物に着いた。

「ここが冒険者ギルドだよ」

魔力が異常に高かった

「すみません。冒険者登録をしたいんですけど」

「そうですか、では登録手数料として千エリス頂きますがよろしいでしょうか？」

え、冒険者登録にお金がいるの？

お金なんてこの世界に来たばかりの俺は当然持っているはずもない。

……………どうしよう？

「あれ、レツはお金持ってないの？」

「……………この街に来る前に路銀が底をついてしまつて」

クリスはため息をつきながらポケットからお金を出す。

「仕方ないなあ、これは貸しだからちやんと返してね？」

「あ、ありがとう」

本当にいい人だ。

なるべく早くに返そう。

「確かに千エリス頂きました。では、こちらの書類に名前、身長、体重、年齢、身体的特徴等の記入をお願いします」

えっと、アマミヤレツ。身長170、体重60、年齢18、黒髪赤眼で背中に……………よし。

「はい、結構です。ではこちらのカードに触れてください。それでステータスが分かりますので、その数値に応じてなりたい職業を選んでくださいね」

えっと、このカードを触ればいいのか？ これだけでステータスが分かるなんてすごい技術だな。

「………… はああああつ!? 何です、この魔力の高さ!? 紅魔族の魔力の平均値を大幅に超えていますよ!? この間冒険者になったアクアさん以上って、あなた何者なんですか!?!」

「うわ、ほんとだ!?! 一体どうしたらこんなデタラメな数値を出せるの!?!」

受付のお姉さんとクリスが俺の魔力の高さに驚く。



エリス様に貰った二つの特典の一つ『自身の魔力の限界値上昇』により魔力の高さを上げたのだ。

「それ以外はどうですか？」

「あ、すみません取り乱しました。えっと後は知力と筋力と敏捷性が一般平均よりそこそこ高い以外は普通ですね。これなら《ウィザード》の上級職である《アークウィザード》がおすすりめです」

魔法使いはダメだ、俺のなりたい職業じゃない。

「俺は剣士になりたいんですけど、この異常に高い魔力を最大限に活かせる剣士職ってありますか？」

「では、魔法と剣術の両方を使える上級職《ルーンナイト》はいかがでしょうか？」

俺的には剣が使えたらそれでいいからこれにしとこう。

「ルーンナイトですね！ 前衛も後衛も出来る万能職ですよ！ では、ルーンナイトつと。冒険者ギルドへようこそアマミヤレツ様。スツフ一同今後の活躍を期待しています！」

受付のお姉さんはそう言つて、にこやかな笑みを浮かべた。

「いやー、すごいね君のステータス。紅魔族がルーンナイトになるだなんて聞いたことないよ？」

「紅魔族？」

「え、違うの？」

首を傾げるクリスに紅魔族について聞いてみる。

紅魔族とは生まれつき高い知力と強い魔力を持ち、変な名前と俺と同じ黒髪赤眼が特徴の種族らしい。

「似てるかもしれないけど、紅魔族じゃないよ。偶然身体的な特徴が一致してるだけだよ」

「そうなの？」

それにしても紅魔族……か。

なんか懐かしい響きがするのはどうしてだろう？

「クリス」

「あ、ダクネス」

後ろから声が聞こえたから振り向いた。

そして声の主を見て絶句した。

女騎士

しかも、すごく美人の。

「彼はさつきギルドの話題になつていた男だったな?」

「うん、アマミヤレツ君って言うんだ」

「ど、ども」

クリスが俺を紹介すると騎士さんは右手を差し出してきた。

「私はダクネスという。よろしく頼む」

「アマミヤレツです。こちらこそよろしくお願いします」

騎士……ダクネスの右手を握る。

「どう、ダクネス? いいパーティーは見つかったかな?」

「ああ、昨日見つけた。パーティーの二人が粘液まみれになつてな。

………羨ましい」

「ああ、……そう」

ダクネスが顔を赤らめて何かを話し、それに対してクリスは呆れた顔をしている。

「それで今日もう一度頼み込んでみようと思うんだ」

「えつとダクネスだったよな? なんの話をしてるんだ?」

「ああ、ダクネスと一緒にクエストを受けてくれるパーティーを探してるんだよ」

パーティー。

それはクエストに行く時に組むチームのこと。

報酬が山分けになるがクエストで命を落とすリスクが低くなるから、冒険者のほとんどはパーティーを組んでいるそうだ。

「みんな入ってるなら俺も入ったほうがいいよな?」

「君は初心者だから入ったほうがいいと思うよ。ダクネスと一緒に今から頼み込んでみれば?」

そうするか。

「少しいいかな?」

「え、あ、はい。なんすか？」

思い至ったが吉日ということで緑色のジャージを着た少年に話しかける。

見た感じこの人は俺と同じ日本人だ。

「このパーティーはメンバー募集をしていると聞いたんだけど、俺をパーティーに入れてくれないかな？」

「あまりオススメはしないですけど……」

「ねえカズマ、この人だれ？ 私とめぐみんがお風呂に行ってる間に面接に来たって人？」

「それはここにいるダクネスだと思うよ」

俺は今日もらった冒険者カードを取り出してカズマと呼ばれた少年に渡す。

「この人ルーンナイトじゃないですか。それにこっちの人はクルセイダー。断る理由なんて無いのではないですか？」

カズマの隣にいた青髪の子と黒髪の子が説得してくれているので後は応答を待つだけだ。

……………とその時。

『緊急クエスト！ 緊急クエスト！ 街の中にいる冒険者各員は、至急街の正門に集まってください！』

街中に大音量のアナウンスが響いた。

## 初陣 　　＼ VS キャベツ ＼

「キャベツ?」

「ええ、この世界のキャベツは飛ぶわ。だから私たちで一匹でも多く捕まえるの」

カズマの隣にいた青髪の女性、アクアにキャベツのことを聞いて思わずため息をついてしまった。

……異世界に来ての初仕事はキャベツの収穫か。

街の正門にどんどんと緑色の球体、目のついたキャベツがこちらへ飛んでくる。

「なあ、カズマ?」

「なんだよ、レツ」

「この世界の野菜ってどうなってるんだ?」

「俺に聞くなよ」

俺とカズマがやる気を無くしているとやたらとテンションの高いダクネスがこつちに来た。

「どうした二人とも、今年のキャベツは一玉につき一万エリスだぞ?」

稼ぐチャンスではないか」

……………

「ちよつとやる気出てきた」

「俺も。ってちよつと待てレツ。お前武器持ってないけど大丈夫なのか?」

「心配ないよ。だって……………」

俺はエリス様から貰った剣を取り出して魔力を込める。

「さて、初陣だ。デュランダル」

電光剣デュランダル。

ガンダムで言うところのビームオーベル、スターオーズで言うところのライオンセイバーだ。

五つのパーツから成るこの大剣はパーツの組み換えによって武器の形状を変えることのできるチートアイテムだ。

「へモードチェンジ・刀」行くぞ！」

「なにあれ、ずるい!!」

俺の近くを通るキャベツをどどん叩き落としていく。  
剣道五段の俺には刀の扱いなんて慣れたものだ。

つてキャベツ達が束になって俺に突進してきた!!

こう言う場合は確か……………

「へモードチェンジ・盾」

守りに徹する方が良かったよな。

盾に当たったキャベツは盾の持つ電気エネルギーで動かなくなる。  
キャベツを檻の中に入れて、またキャベツをとりに行く。

「へモードチェンジ・刀」はあっ!!」

「…………おいアクア、レッツが使ってる武器って何？」

「ああ、あれは電光剣デュランダルよ。パーツの組み換えによっていろんな武器に姿を変えるチートアイテムなの」

なにそれずるい!!

ああ、俺はなんでこんな駄女神を連れてきてしまったんだろう？

レッツみたいな武器をもらっていけばアニメや漫画みたいに活躍できたのにツ!!

「どうしたのよじつと私の顔なんて見て。あ、分かったわ！ カズマさんもようやく私のことを…………」

「レッツの武器とチェンジで!!」

襲いかかってくるアクアを押さえながらダクネスのいる方を向くと、ダクネスもキャベツに対して懸命に剣を振るっていた。

「やあー!」

スカッ

「せいー!」

スカッ

「せや!!」

スカッ

……………全く当たっていない……………だと？

全く攻撃が当たらないとは言っていたがまさかここまでとは。

「……ねえ、あの人全く当たってないんですけど?」

俺たちがその光景に唾然としてしていると突然

「ぎゃあー!」

「ぐえええー!」

前の方に出ていた冒険者たちが悲鳴が聞こえ始めた。見るとキャベツに逆襲を受けているようだ。

「危ない!」

ダクネスは気絶した仲間らに覆い被されて動かなくなった冒険者の前に立ちキャベツからの攻撃を守る。

「ここは私が! 今のうちにツ!!」

「無理だ、あんただけでも逃げてくれ!」

「無茶を言うな!」

キャベツの執拗な猛攻にダクネスの鎧が剥がれ落ちていく。

それでもダクネスは動かないでいる冒険者を必死で守り続ける。

「ん、くう……」

「ダクネス………あれ?」

少しだけダクネスをカッコいいと思ってしまったが、彼女の顔を見て俺はふと違和感を抱く。

なんか、あれって……

「喜んでるっ……!?!」

ダクネスの顔は紅潮して笑っている。そして息も荒い!

間違いない、彼女は………

「ドMだ!!」

「……ドMだ」

冒険者から悲鳴が上がり、そちらを見るとキャベツの攻撃を受け続けるダクネスの姿が。

すぐに助けに向かおうとしたが、彼女は頬を赤らめて色っぽい息を吐いていたのだ。

……ダクネスはもう少し楽しんでいて頂こう。まずはダクネスの

庇っている冒険者の救助が先だ。

「そこをどけええええ!!」

俺に襲いかかってくるキャベツを刀で斬っていきながら、冒険者へ駆け寄る。

そして彼に覆いかぶさった仲間であろう男をどかしてやる。

「ここは彼女が守ってくれています！今のうちに早く正門の方へ！」

「でも兄ちゃんは……！」

「彼女の周りにいるキャベツを倒したらすぐに戻ります。だから早く！」

男は正門の方へ走っていく。

その後ろ姿を見届けた俺はデュランダルの余ったパーツを盾に変形させてダクネスの前に立つ。

「お、お前……!!」

「すみません、でももう十分に楽しんだでしょう!? そろそろケリをつけましょう!!」

ダクネスを一喝した直後に盾を放り捨てて刀を構える。剣道の基本的な構えだ。キャベツの群れが俺にぶつかり合い吹き飛ばされそうになるが必死で耐えながら意識を丹田に置く。

「うぐ!? ……ふう、<sup>テンダウ</sup>へ天宮流五ノ型才凜」

そして一気に刀で俺を中心に円を描く。

俺とダクネスの周りには真つ二つにされて動かなくなった大量のキャベツ。俺はそれを気にも止めず、手早く落とした盾を拾いダクネスの手を引いて正門に走る。

直後

「へエクスプロージョンッ!!」

俺たちの立っていた大地が一瞬で爆発四散する。

「うわあああ!?」

「ぬわあああああん!!」

その衝撃で俺とダクネスは仲良く吹っ飛ばされてしまった。

## パーティー仲間が出来た

この世界に来て初めての食事である、今日収穫したキャベツの炒め物を一口食べる。

「うまく、俺こんなに美味しいキャベツを食べた事がない」

この世界の食事が自分に合うのか不安だったが、食べたら野菜の甘みが口いっぱいに広がって何とも言えない幸せな気持ちになる。

無事にキャベツ狩りが終わった街中では、あちこちで収穫されたキャベツを使った料理が振る舞われていた。

一玉あたり一万エリス……初めてのクエストであったがこれで自分の生活は困らないであろう。

「すみませーん、キャベツと豚肉の蒸し焼きくださーい！」

「まだ食べるのかよ？」

「だって美味しいからさー」

「本当だよ。何故たかがキャベツの野菜炒めがこんなに美味しいんだ。納得いかねえ、ホントに納得いかねえ」

その後、結局カズマもキャベツ狩りに参加してたくさんのキャベツを収穫したようだ。

だが俺はカズマの活躍を見てはいない。何故かって？ 爆裂魔法に巻き込まれて気絶していたからさ。

「しかし、やるわねダクネス！ あなた、さすがクルセイダーね！ あの鉄壁の守りには流石のキャベツ達も攻めあぐねていたわ」

「いや、私など、ただ硬いだけの女だ。私は不器用で動きも早くは無。だから、剣を振るってもロクに当たらず、誰かの壁になって守るしか取り柄が無い。……その点、レツの剣捌きは見事なものだ。襲いかかってくるキャベツをああも正確に切り裂いていたではないか。他の冒険者の驚いた顔と言ったら無かったな」

ダクネスは優しい笑みを浮かべて俺を見てる。

俺はさつき注文したキャベツと豚肉の蒸し焼きを一口食べて水を飲み、

「ぶはあ！ いや、幼い頃から竹刀を握っていただけで実は実践経験



は皆無だったんだ。それにあの活躍のほとんどはこのデュランダルに任せつきりだったよ。実際にめぐみんの撃った爆裂魔法の衝撃に巻き込まれただけで気絶するほどの雑魚だからね。それにしてもあの魔法は凄かった」

「ふふ、我が必殺の爆裂魔法のまえにおいて、何者も抗う事など叶わず。……それよりもカズマの活躍こそ目覚ましかったです」

「確かに、俺は気絶してたから分かんないけど、潜伏スキルで気配を消して、敵感知で素早くキャベツの動きを捕捉、そして背後からのスティールでキャベツを大量に取ったんだよな？　すごいじゃないか」  
やがてアクアが、テーブルの上に平らげた皿を置く。

そしてただ自由気ままにキャベツを追い回してあまり活躍しなかったと言う彼女は、優雅に口元を拭い、

「カズマ……。私の名において、あなたに【華麗なるキャベツ泥棒】の称号を授けてあげるわ」

「やかましいわ、……。ああもう、どうしてこうなった！」

カズマは頭を抱えてテーブルに突っ伏した。

そんなカズマに俺は尋ねてみる。

「ところで俺の剣の腕はどうだった？　少なくともこのパーティーの足を引っ張るような事はしないつもりだ。だから俺をお前らの仲間に加えてくれないか？」

「……のくせに……」

「え？」

「武器の力のくせに何自分の力のように振る舞ってんだよこの野郎！

俺はなあ、お前みたいな物の力を借りないと何も出来ない奴は嫌いなんだよ!!　だからあっち行って、ほら早くあっち行って!!」

急にカズマは俺に怒鳴ってそんなことを言ってきた。

確かに俺がデュランダルの力のお陰で活躍できたことは自覚している。だけど剣の腕だけは幼い頃から磨いてきた俺の力だ。それを武器の力だと言われると少し、いや、大分傷つくな。

「何言ってるのよクソニート！　確かにデュランダルは雷の力と武器変化の力を持つてるけど、それだけなのよ!!」

「…………え？」

「他の特典の武器と違って、命中率、攻撃力を上げる能力なんてついてないんだから、あの剣の腕はまごうことなきこの子の力よ!!」

「……………レツさん。すいません! ほんつとうにすいません!!」

「……………いいですよ。どうせ俺の力なんてたかが知れているからね」

「本当にすみませんでしたー」

カズマは床に頭を擦り付けて俺に謝罪した。

「では…………。名はダクネス。職業はクルセイダーだ。一応両手剣を使っではいるが、戦力としては期待しないでくれ。なにせ、不器用すぎて攻撃がほとんど当たらん。だが、壁になるのは大得意だ。よろしく頼む」

「改めて俺は天宮烈だ。職業はルーンナイト。攻撃の当たらないダクネスの代わりに俺が敵には攻撃を与えていく。ダクネスがこのパーティーの盾になるなら俺はこのパーティーの剣になろう。よろしく頼むよ」

カズマの誤解を解いて改めて返答を聞いた結果、パーティーに入れてもらえました。

ソロでクエストを受けるとやく六割の確率で死亡するって聞いたから本当に良かった。

「ふふん、ウチのパーティーもなかなか、豪華な顔触れになってきたじゃない? アークプリーストの私に、アークウイザードのめぐみん。そして、防御特化の上級前衛職である、クルセイダーのダクネスに、剣と魔法が使える上級前衛職である、ルーンナイトのレツ。五人中四人が上級職なんてパーティー、そうそうないわよカズマ? あなた、凄くついてるわよ? 感謝なさいな」

「ああ、俺の冒険者ライフが理想からどんどん遠ざかっていく…………。レツ、お前だけが頼りだ。本当によろしくな……………」

「ああ、任せておけ!」

## バーベキューを楽しんだ

「……ほう、見違えたではないか」

「おおー、結構似合ってるな」

「カズマがようやくちゃんとした冒険者みたいに見えるのです」

冒険者ギルドの一角で俺たちは思い思いの感想を述べた。

俺たちのリーダーであるカズマがまともな冒険者の服を着ているのはなんとも新鮮だ。だつて出会ってからここ数日、コイツはずつとジャージ姿だったんだもん。

ちなみに俺はまだ日本で着ていた私服だ。何故かつて？ 金が無いからさ。

キャベツの報酬が来るのはもう少し先と聞いてその日は馬宿で一泊し、今日までずっとバイトをしてその日を生きる金を稼いでいた。そして今日はクエストを受けるみたいなので、バイトを休みギルドへ顔を出したのである。

「おう、せっかくだし盾は持たず、レツみたいに魔法剣士みたいなスタイルで行こうと思うんだ」

「いや、魔法剣士ってことになってるけどぶっちゃけまだ魔法を覚えてないんだよな。あー、誰かせめて中級魔法が使える人が知り合いにいればなあ」

まあ、この世界に来て日も浅い。

のんびりと根気強く探すとしよう。

「つで、話を戻すけど、今日はどのクエストに行くつもりなんだ？」

「いや、まだ決まってないんだよ」

決まってないのかよ……。

「ジャイアントトードが繁殖期に入っていて街の近くまだ出没しているから、それを……」

「カエルはやめよう！」

ダクネスの意見をアクアとめぐみんが一蹴する。

「なんでだ？ 聞いた話じゃ、カエルは刃物を通り易くて倒し易いし、攻撃も舌を使う捕食しか無いらしいじゃんか。それにそれすらもき

ちんと装備を整えてたら狙われないんだろ？ 万が一のときはダクネスを盾にすれば済む話だし、それでいいじゃん」

「私を……盾に!? ……んん、くう……」

「……お前も中々の外道だな。あとダクネス。お前、ちよつと興奮しただろ?」

「してない」

ダクネスも食べられるのは一種のご褒美みたいだからいいと思っただけだなー。

「なら、今日は一番レベルの上がないアークプリストであるアークのレベル上げに行きませんか?」

めぐみんが依頼の紙を剥がしてこっちに持ってきたので、それを受け取り内容を確認する。

『共同墓地に湧く、ゾンビメーカーの討伐』か。

「カズマ、これでいいんじゃないか? いざとなったら、俺がぶつ飛ばせばいいだけの話だからさ」

「そうだな。アークアはどうす……」

「……………すかー……………」

さつきからやけに静かだなと思っていたが寝ていたのか……

時は夕暮れ。

俺たちは共同墓地の近くで鉄板を敷きバーベキューをしていた。

「ちよつとカズマ、その肉は私が目をつけていたヤツよ! ほら、こっちの野菜が焼けてるんだからこっちを食べなさいよこっち!」

「俺、キャベツ狩り依頼どうも野菜が苦手なんだよ、焼いてる最中に飛んだり跳ねたりしないか心配になるから」

「大丈夫だろ、焼く前に俺がトドメを刺してるから安心して食えよ」

「そう言うレッツはさつきから焼いてばかりでないですか、あなたも食べたらどうです?」

「そうだぞ。私が焼くのを変わってやろう」

ダクネスが焼くのを変わってくれたので、焼いていたトウモロコシを齧る。うん、うまい。

じゃあ、今度はこのレタスを食べてみよう。これもシャキシヤキしていいな。

次はナスを……

「レツは野菜が好きなの？ ならこのカボチャもあげるわね」

「ありがとう、アクア。以前は野菜もそんなに好きじゃ無かったんだけど、ここの野菜はどれも味がいいよな」

お、このカボチャも甘くて美味しい。

俺が野菜を楽しんでいるそばで、カズマはマグカップにコーヒーの粉を入れて、ヘクリエイト・ウォーター〜と言う魔法で水を注ぎ、マグカップの底を今度はヘティンダー〜と言う火の魔法で炙る。

……………

「悪いカズマ、俺にも水をくれ」

「私にもお願いします。って言うかカズマは、何気に私より魔法を使いこなしてますね。初級魔法なんてほとんど誰も使わないものなのですが、カズマを見ているとなんか便利そうです」

カズマの魔法により生成された水を俺は一口飲み息を吐く。

そして今度は肉を食べる。これは牛肉かな？

「いや、元々そうだった使い方をするんじゃないのか？ 初級魔法つて。あ、そうそう。ヘクリエイト・アース〜！ ……なあ、これって何に使う魔法なんだ？」

「……えっと、その魔法で創った土は、畑などに使用するとよい作物が穫れるそうです。……それだけです」

それいいな。この魔法があれば、より美味しい野菜が食べられるのか。

そんな事を思う俺の隣でアクアが吹き出した。

「何々、カズマさん畑作るんですか！ 農家に転向ですか！ 土も作れるしクリエイト・ウォーターで水も撒ける！ カズマさん転職じゃないですかやだー！ プークスクスー！」

カズマは無言で手の平に載った土をアクアに向けて、左手を構える。

「ヘウインドブレス〜！」

「ぶあああああつ！　ぎゃー！　目、目があああつ！」

突風で吹き飛ばされた土がアクアの顔面に直撃する。目に砂が入ってしまったアクアは地面を転がり回って悶え苦しむ。

「……なるほど、ここうやって使う魔法か」

「違います！　違いますよ、普通はそんな使い方しませんよ！　というか、なんで初級魔法を魔法使い以上に器用に使いこなしてるんですか！」

……便利だな初級魔法。今度カズマに教えてもらおう。

## リッチーと出会った

「……冷えてきたわね。ねえカズマ、引き受けたクエストってゾンビメーカー討伐よね？ 私、そんな小物じゃなくて大物のアンデッドが出そうな予感がするんですけど」

現時刻は深夜を回った頃。

敵感知スキルを持つカズマを先頭に、俺たちは共同墓地へ歩いていく。

「……おい、そういった事言うなよ、それがフラグになったらどうするんだ。今日はゾンビメーカーを一体討伐。そして取り巻きのゾンビもちゃんと土に還してやる。そしてとつとと帰って馬小屋で寝る。計画以外のイレギュラーな事が起こったら即刻帰る。いいな？」

カズマの言葉に俺を含めたパーティーメンバーが頷く。

そして暫く墓場を歩いた後、カズマがピクリと反応した。

「何だろう、ピリピリ感じる。敵感知に引つかかったな。いるぞ、一体、二体……三体、四体……？」

多くね？

普通ゾンビメーカーの取り巻きのゾンビは二体か三体。

流石に誤差か？ いや、嫌な予感がする。

「ヘモードチェンジ・短剣」。カズマ、念のためにこれを持ってろ。  
「ヘモードチェンジ・盾」。今回爆裂魔法が使えないめぐみんはこれで自分の身を守れ」

「ああ、助かる」

「ありがとうございます」

背中に格納していたデュランダルを短剣、盾に変形させてそれを近接に向かないカズマとめぐみんに渡して、自分も刀を構える。

「ちよつとレッツ！ 私には!？」

貰えなかったアクアが抗議を始めるが、アクアの後ろに俺が立って言う。

「アクアは俺とダクネスで守る。ダクネス、前方は任せたぞ?。」

「ああ、馬車馬の如くコキ使ってくれ」

そして顔を赤らめてそんな事を言うダクネス。もう、この変態は……！  
ダクネスを先頭にアクアたち三人、そして一番後ろが俺と言う形で進んでいく。

そして墓場の中央まで進むと青白い光が見えた。

……何だ？

遠くに見えるその青い光は、大きな円形の魔法陣。

その魔法陣の隣には、黒いローブの人影が見えた。

「……あれ？ ゾンビメーカー……ではない……気が……するのです  
が……」

「突っ込むか？ ゾンビメーカーじゃなかったとしても、こんな時間に墓場にいる以上、アンデッドに違いないだろう。なら、アークプ  
リーストのアクアがいれば問題無い」

「落ちつけダクネス。相手が何者か分からない以上、撤退を視野に入  
れた方が良く。少し様子を見よう」

俺は後ろからダクネスの横に移動して、いつ来ても良いように刀を  
構える。

つとその時、

「あ————っ!!」

突如叫んだアクアは立ち上がり、そのままローブの人影に向かって  
走り出す。

「ちよっ、おい待てー!」

カズマの静止も聞かずに飛び出していったアクアは、ローブの人影  
に駆け寄ると、ビシツと人影を指差した。

「リッチーがノコノコこんなところに現れるとは不届きなっ! 成敗し  
てやるっ!」

「カズマ、これって止めたほうがいいんじゃないか? 側から見ると  
もう弱い者虐めにしか見えないぞ?」

「だな」

カズマはゆっくりとアクアの後ろへ回り込むと剣の柄で小突いた。



痛かったのか涙目でカズマに食ってかかるアクアをよそに、俺は震えながらうずくまるリッチー？ に声をかけた。

「大丈夫ですか？ 貴方リッチーって言われてましたが本当なんですか？」

「だ、だ、大丈夫です……。おっしゃる通り、リッチーです。リッチーのウイズと申します」

彼女がフードを上げると、二十歳くらいの人間にしか見えない、茶色い髪の女性だった。

刀を構えたままウイズに問いかける。

「こんなところで何をしてるんです？ ここに埋葬されている死体を自分の配下にする為に来たんですか？」

「ちよつとレッツ！ こんな腐ったみかんみたいなのと喋ったら、あなたまでアンデッドが移るわ」お前は黙ってる駄女神「ぎゃん!」

アクアが再びウイズに魔法をかけようとするのを、カズマがまた剣の柄で小突いて阻止する。

ウイズは俺の後ろへ隠れて、怯えた様な顔で震えながら、

「そ、その……。私は見ての通りリッチー、ノーライフキングなんてやってます。アンデッドの王なんて呼ばれるくらいですから、私は迷える魂達の話が聞けるんです。この共同墓地の魂の多くはお金が無いがためロクに葬式すらしてもらえず、天に還る事なく毎晩墓地を彷徨っています。それで、一応はアンデッドの王な私としては、定期的なここを訪れ、天に還りたがっている子供達を送ってあげているんです」

「悪い奴かと思ったら、普通にいい人だ」

あまりに真つ当な理由だったことに彼女は危なく無い事を悟り刀を仕舞う。

それにしても、何をするにも金か。どこの世界も変わらないな。

カズマが街のプリーストに任せたらどうかとウイズに相談するが、この街のプリーストは金儲け優先の奴しかいないため、供養すらもしないらしい。

聖職者辞めちまえ、プリーストども。

「分かりました。だったらせめてゾンビを呼び起こすのは止めてください。俺たちは、ゾンビメーカーを討伐してくれて依頼を受けてきたんですよ」

俺の問いに、ウィズは困った表情を浮かべ。

「私がここに来ると、まだ形が残っている死体は私の魔力に反応して勝手に目が覚めてしまうんです。……その、私としてはこの墓地に埋葬される人達が、迷わず天に還ってくれば、ここに来る理由も無くなるんですが……。……………えっと、どうしましょうか」

「納得いかないわ!」

「でも、あんないい人を討伐したら君は女神なんかじゃなくてただのクズになってしまうぞ?」

俺の一言でアクアは何も言えなくなったのか黙ってしまった。

俺たちはウィズを見逃すことに決めた。そしてその後はアクアがあの共同墓地の浄化をすることで今回の事件は解決したのだ。

……それにしても。

「今回の依頼は失敗か。残念残念」

「「あ」」」

## 魔法について考えてみた

ゾンビメーカーの依頼を受けた翌日。

バイトを済ませた俺は、アクセルの目立たない道へ入る。

「む、レツじゃないか。こんな所で何をしてるんだ？」

「ああ、ダクネス。俺は今からとある店へ行くんだよ」

ダクネスは一瞬キョトンとすると、すぐに顔を赤らめて

「とある店？ ……レ、レツ！ お前って奴は、まさかこんな日も高いのにかがわしい店に…!!」

「んなわけあるか」

アホなことを言うダクネスに内心呆れながら、その道を歩いていく。

しばらく歩き続けると一軒の小さな魔道具店が見えた。

懐から住所の書かれた紙を取り出して住所が正しいか確認する。

「合ってるな」

「なあレツ、ここになんの用が？」

「……ついて来てたのな」

「邪魔者を見る目で私を……んん！」

DMを無視して店のドアを開ける。

ドアについている小さな鐘が、カランカランと涼しげな音を立てて、俺達の入店を店主に告げる。

「いらっしやい……、ああっ!？」

「こんにちは。あなたは昔は有名なアークウィザードだったと聞いたんですけど……」

そこにいたのは、先日共同墓地で出会ったウィズだ。

彼女はアクセルの街では凄腕のアークウィザードとして通っている。

そこで魔法を覚えたかった俺は、彼女に師事を頼もうと思ったのだ。

「魔法の習得の為にですか……。分かりました、では善は急げです。早速行きましょう」

「いいんですか？ 別に魔道具店が定休日の日で良いですよ？」

「大丈夫です。どうせお客さんはあまり来ませんし」

「それでいいのか魔道具店の店主？」

「ま、まあいいや。じゃあ早速、草原に行こう。」

「ダクネスも来るだろう？」

「ああ、今日は鎧を着ていないからな、ジャイアントトードに食べられて………んん！」

「やっぱお前くんな」

「いいですか？ 魔法を使う為に重要なのは、詠唱と魔力の流れを読むことです。今から魔法を使うので、レツさんはその魔法を習得して使ってみてください」

「よろしくお願いします」

ウイズが言うことをメモ帳にメモする。

その側で大きなカエルに頭から食べられているダクネス。もうコイツのことは放っておこう。

「ヘインフェルノッ！」

ウイズがそう唱えると、遠くにいたカエルは一瞬にして焼け焦げてしまった。

魔法って凄い。

じゃあ早速この魔法を習得して……と。

「ヘインフェルノッ！ ……なん………だと」

早速、魔法を唱えてみたが手の平から小さな火が出たくらいだった。

これじゃあカズマの使うティンダーじゃないか。

魔力の流れを読めてなかったのか……。

「レツさんは魔法を使うときはワンドか杖を使った方がいいかもしれないですね」

ワンドと杖は魔法を使うときに、魔力の流れを補佐する武器だ。だからそれを使うことで俺もまともに魔法を使えるとのこと。

「……もう今日は辞めにしますか？」

「いや、せっかくだから、他の魔法も教えて下さい」  
「分かりました。では……」

その後、ウィズから中級魔法と上級魔法を教えてもらい、草原を後にした。

つとその前に……

「モードチェンジ・短剣」おりや！ 大丈夫かダクネス？」

「お構いなく」

んもおお、このヘンタイめ！

アクセルの街に帰ってきた俺は出店で買った紙に羽ペンでアイデアを書いていく。

魔法を使う為には杖かワンドが必要……

俺の持っているテイランドルのことを考えると、ワンドの方がいいか。

……いや、ちよつと待て。

せっかくだしこの剣の機能をさらに拡張出来るような特注品を作ってもらうのもありだな。

「あのー、ご注文は……」

「へ？ あ、すみません。じゃあ野菜スティックと果汁水を」

そういえばここはギルドの酒場だった。何も注文せずに居座るなんて迷惑極まりないからな。反省反省。

話を戻すが、剣の機能を拡張させるにしても一体どうすればいいんだろう？

俺はただの人間だから神器になんて詳しくはないし……

「難しい顔をしているな。ほら、注文したものがやってきたぞ。少し息ついたらどうだ？」

「それもそうだね」

なんだかんだできつきから付いてきているダクネスの助言に俺は考えるのをやめて野菜スティックに手を伸ばす。

クイツ。

野菜スティックが伸ばした手から逃れるように、ひよいと身をか

した。

……嘘やん。

「何をしているんだレツ。野菜スティックはこうやって取るんだぞ？」

ダクネスがコップのフチをピンと指で弾くと、野菜スティックがビクリの跳ねる。

一瞬動かなくなった野菜スティックをダクネスは一本つまんで口に運んだ。

「いや、元いた国じゃ野菜はそもそも動いたりしないからさ」

「そうなのか？ 野菜が飛ぶのは当たり前なんだが」

俺は元いた国の野菜がいかに安全かをダクネスに語りながら、野菜の側でパチンと指を弾く。そして細くスライスされたニンジンをつまみ口に運ぶ。

ああ、この世界の野菜はやっぱり美味しい。

そしてこの果汁水……オレンジジュースを飲む。これも程よい酸味が口いっぱい広がって美味しいな。

「ところでレツはこの街に来て日も浅いんだったな？」

「ああ、ここに来て丁度一週間が経とうとしているな」

「分からないことがあったら私に言ってくれ。こうして私たちが知り合ったのも何かの縁だ」

そう言ってダクネスは微笑んだ。

普段からそうしていればいいのに。

あつという間に注文した野菜スティックとオレンジジュースを完食した俺は、改めてワンドを買うか杖を買うか思索する。

……デュランダルは色々な武器に変形する特性を持っている。そのデュランダルでも変形できない武器は確か……

俺の使う流派……天宮流テングウの分野について……

「なるほど、こうすれば！」

「うわ、い、いきなり叫ぶな。びっくりするだろう！」

考えがまとまった俺はアイデアを紙に書き写して席を立つ。

「ダクネス、さつき分からないことがあったら私に言ってくれって

言ってたよな。じゃあ悪いけど武器屋の場所教えてくれ！」  
カズマたちもびっくりするだろうな。

## 束の間の休日

先日のキャベツ狩りでの報酬が支払われた。

「カズマ、レッツ、見てくれ。報酬が良かったから、修理を頼んでいた鎧を少し強化してみた。……どう思う?」

「なんか、成金趣味の貴族のボンボンが着けてる鎧みたい」

「……カズマはどんな時でも容赦ないな。私だって素直に褒めて貰いたい時もあるのだが」

俺は似合うと思うけどな。ダクネスの強化した鎧。まあ、敢えて口に出さんですけど。

……それにしても。

「ハア……ハア……。た、たまらない、たまらないです! 魔力溢れるマナタイト製の杖のこの色艶……。ハア……ハア……ッ!」

「めぐみん、お願いだから他所でやって……ッ!」

新調した杖を頬擦りするめぐみんの気持ち悪さといったら!

他の冒険者の人たちもめぐみんの奇行にドン引きしている。他人のフリしておこう。

「そういえばレッツは報酬で何を買ったんだ?」

「俺はこれだよ」

俺は出し惜しみする事なく買ったものを取り出す。

「杖じゃないですか。は! まさかレッツも遂に爆裂道に……!?!」

「それは無い」

この杖はマナタイトとアダマンタイトをふんだんに使った特注品で、これ一つでなんと150万エリスもしてしまった。

つい先日ウィズに教えてもらった中級魔法や上級魔法もこれですよやく使えるという訳だ。

その事を説明すると、

「いや、150万ってこれはまた浪費したな」

「というかそもそも杖にアダマンタイトを使うなんてアホなんじゃないですか?」

「私もこれはちよつとどうかと思うぞ……」



なんとも言いたい放題な奴らだ。

俺は無言でデュランダルを取り出し、それを短剣モードにする。そしてそれを杖の先端に取り付けた。

「ヘモードチェンジ・槍」ってな」

「なるほど。杖にアダマントライトを使ったのは、槍としても使えるようにするためですか」

「ほお、考えたな。だが、ルーンナイトは槍術スキルなんて習得できないぞ?」

ダクネスの疑問に答えるために槍を軽く振り回してみる。

「「おおー!」」

「あの一、ギルドで槍を振り回さなくてももらえますか?」

「あ、すみません。次から気をつけます!」

そしてギルド員に叱られましたとき。

「それにしても、スキルを持ってないのによくあんなに軽々と槍を振り回せるな」

「昨日少し練習したんだよ」

俺が杖を買った理由は二つ。

一つは爆裂魔法しか使わないめぐみんのかわりにその他の魔法を使うため。そしてもう一つはダクネスを壁にして戦う場合はリーチの長い武器の方が有利だからだ。

この杖を使うことで、まだまだいろんな武器に変形するがそれはまた後日見せるとしよう。

せっかく新しい武器を手に入れたんだ。今日はクエストに行きたくないな。

そう思っただクネスと一緒にクエスト掲示板を見た俺は絶句した。

……高難易度クエストしか無い……だと……??

ギルド職員であるルナさんがやってきて

「申し訳ありません。最近、魔王の幹部らしき者が、街の近くの小城に住み着きまして……」

「……そのせいで、この街周辺のモンスターが隠れてしまって、高難易度クエストしか残ってない?」

「……はい」

嘘やん。

「この際、高難易度クエストを受けるしか無いようだな！ レッ！  
これだ、これにしようではないか！ 山に出没するブラックファング  
と呼ばれる巨大グマを……」

「死にたくないから俺はパス。行くなら一人で行ってくれば？」

「んん！ 相変わらず容赦がないな。レッ！」

相変わらず俺の相棒は平常運転だ。

しばらくは危険ということクエストを休みにした俺たちは、カズマとめぐみんは爆裂散歩。キャベツの報酬があまりもらえず酒場のツケを払ったことで（カズマに無理やり借りた金で）文無しになったアクアはアルバイト。そしてダクネスは、しばらく実家で筋トレに励むとのこと。そして俺も一日中筋トレに励んでいた。

魔法ではなく剣を主体に戦う俺にとって、デュランダルを簡単に使いこなせるようにする事が俺の当分の目標だ。

まず朝は腕立て、腹筋、スクワットを百回ずつこなしてから朝食を取る。その後、夕方まで外壁の拡張工事の仕事だ。それが終わったらアクセルの外周を走り、銭湯に入って夕食を摂り宿屋で寝る。

なんともハードな一日だが、なかなか充実して楽しいな。

「お前まだキャベツの報酬が百万残ってるだろ？ なんでバイトしてんだ？」

「金は多いに越した事はないからね。それよりもカズマもそろそろバイトしろよ。この調子じゃすぐに金も無くなるぞ？」

「言うなレッ」

筋トレを始めてから一週間。一週間ぶりにカズマに会った俺はギルドと一緒に食事を摂っていた。

カズマ曰く、めぐみんの爆裂散歩に付き合い続けた結果、爆裂魔法のできが分かるようになったらしい。

なんともどうでもいい特技を手に入れたな。

それにしても……

「お前の言ってるその古城ってもしかして魔王の所の幹部が住み着いてる城じゃないか？」

「え、いや、そんなまさかk 『緊急！ 緊急！ 全冒険者の皆さんは、直ちに武装し、戦闘態勢で街の正門に集まってくださいっ！』……嘘だろ？！」

「もお、このうっかりさん」

さーて、楽しい楽しい謝罪のお時間だ。

## デュラハンの呪い

街の正門に集まった冒険者達は、凄まじい威圧感を放つモンスターを前に、ただ呆然と立ち尽くすことしかできなかった。

デュラハンのベルディア。

魔王軍一の剣の使い手と言われる首なしの騎士。

こうして相對するだけで足が震えることから、コイツは今のレベルの俺とは次元が違いすぎる存在であることが分かる。

そんなベルディアはプルプルと震えだし……

「……俺は、つい先日、この近くに越してきた魔王軍の幹部の者だが……まままま、毎日毎日毎日毎日っ!! おお、俺の城に、毎日欠かさず爆裂魔法撃ち込んでくる頭のおかしい大馬鹿者は、誰だああああああああー!!」

それはそれはもうお怒りだったとき。

「爆裂魔法?」

「爆裂魔法だつてよ」

「爆裂魔法と言ったら……?」

「爆裂魔法を使えるやつと言ったら……?」

おお、冒険者の皆さんが一同せーのでめぐみんの方を向いたぞ。こんなに以心伝心する事つてあるんだな?

「……………フイツ」

あ、自分の隣にいた名も知らない魔法使いの子の方を向いたぞ?

「ええっ!?! あ、あたしっ!?! なんてあたしが見られてんのっ!?! 爆裂魔法なんて使えないよっ!」

……………

俺は無言でめぐみんの腕を掴み前へ出る。

「れ、レツ!?!」

「大丈夫だから」

冒険者達に目配せをして、デュラハンへの道を開けてもらう。

そしてデュラハンから十メートルくらい離れた場所にめぐみんと俺は対峙する。

「お前らが……！ お前らが、毎日毎日俺の城に爆裂魔法ぶち込んで行く大馬鹿者か！ 俺が魔王軍幹部だと知っていて喧嘩を売っているなら、堂々と城に攻めてくるがいい！ その気がないなら、街で震えているがいい！ ねえ、なんでこんな陰湿な嫌がらせをするの!? どうせ雑魚しかいない街だと放置しておれば、調子に乗って毎日ポンポンポン撃ち込みにきおって……っ!! 頭おかしいんじゃないのか、貴様らっ!」

おお、すごい剣幕だな。

中学生の頃に散々調子に乗っていたいじめっ子を半殺しにしたときの、いじめっ子の親以上だ。

少し怯んだがすぐにデュラハンを真っ直ぐと見据えて……頭を下げた。

「すみません！ この子が爆裂魔法の練習のために偶然あの城を標的にしてしまったみたいなんですっ！ 本人もあなたがいるという事は知らなかったみたいなので、今後こういうことがない様にしますのどうか勘弁しては頂けませんでしょうか!」

「えっ!? レ、レッツ!」

悪いことをしたら謝る。これは小さな子でも知っている鉄則である。

後ろからぼそぼそとカズマとアクアとダクネスの声が聞こえる。

「……まさかのまさかで、ごめんなさいしたわよ？ いくらなんでも律儀すぎないかしら?」

「ここは俺たちも頭を下げておくか?」

「そうした方が良いんじゃないか？ せっかくレッツがここまでしてくれているんだ」

俺がチラリとデイラハンを見ると、手を顎につけてうんうんと頭を縦に振っていた。

「ほう、素直に謝るか、紅魔の騎士よ。ならばその馬鹿な方の紅魔の娘も謝罪すると言うのなら許そうではないか」

「あ、すみません。身体的特徴が一致しているだけであって、俺は紅魔族ではありません」

「そ、そうか赤眼の騎士よ。では、馬鹿な方の紅魔の娘よ。さっさと謝罪せよ!!」

なんとか今回は丸く収まりそうだな。めぐみんにも後できちんと、もう城に爆裂魔法を撃ってはいけなと言いついて聞かせておこう。

「……今、私のことを馬鹿と言いましたね?」

俺の隣でめぐみんがわなわなと震え出す。

嫌な予感しかしない。

「我が名はめぐみん! アークウイザードにして、爆裂魔法を操る者……! 余裕ぶっていられるのも今の内です。こちらにはアンデッドのスペシャリストがいるのですから! 先生、お願いします!」

この野郎、謝るところか逆ギレしやがった! 後でカズマに言っただけでステイルの刑に処してやる!

「しようがないわねー! 魔王軍の幹部だか知らないけど、この私がいる時に来るとは運が悪かったわね。あんたのせいでもなクエストが請けられないのよ! さあ、覚悟はいいかしらっ!」

よし、空気の読めないアクアもステイルの刑だな。

「ほう、これはこれは。プリーストではなくアークプリーストか?」

この俺は仮にも魔王軍の幹部の一人。こんな街にいる低レベルのアークプリーストに浄化されるほど落ちぶれてはいない。そうだな、ここは一つその赤眼の騎士の謝罪も聞かない紅魔の娘を苦しませてやろうかつ!」

デュラハンは、左手の人差し指をめぐみんへと突き出す。

それを見たアクアが魔法を唱えようと杖を構えるが

「間に合わんよ。汝に死の宣告を! お前は一週間後に死ぬだろう!!」

って危ない!

俺はめぐみんの前に回り込み、デュラハンの指から溢れ出た瘴気を受ける。

「く、ああああ!」

「なっ!? レ、レッツ!」

「貴様!」

めぐみんが叫ぶのと、激昂したダクネスがデユラハンに突っ込むのは同時だった。

「下がれダクネス！」

あ、ダクネスがデユラハンの乗ってる馬に蹴り飛ばされた。

俺は急いでダクネスを抱き起こす。

「汝にも死の宣告を！」

っ!?

ダクネスも俺が受けたやつを!?

「くそっ、やられた、死の宣告か！　ダクネス、レッツ、大丈夫か!？」

「……ふむ、なんとも無いのだが」

「俺も平気だ。心配するな」

デユラハンは勝ち誇った様に宣言する。

「その呪いは今はなんとも無い。若干予定が狂ったが、仲間同士の結束が固い貴様ら冒険者には、むしろこちらの方が応えそうだな。きちんと謝罪した赤眼の騎士には気の毒だがな」

そう思うなら解いてくれよ。何の呪いを掛けたは知らんが。

「……よいか、紅魔族の娘よ。このままではその金髪の騎士と赤眼の騎士は一週間後に死ぬ。ククッ、お前の大切な仲間は、それまで死の恐怖に怯え、苦しむことになるのだ……。そう、貴様の行いのせいだな！　これより一週間、仲間の苦しむ姿を見て、自らの行いを悔いるがいい。クハハハッ、素直に俺の言う事を聞いておけばよかったのだ！」

え、し、死ぬ？

……俺が？

あ、ああ……

俺が恐怖で震える傍ら、ダクネスは高揚した感じで

「な、なんて事だ！　つまり貴様は、この私に死の呪いを掛け、呪いを解いて欲しくば俺の言うことを聞けと！　つまりはそういう事なのか！」

「えっ」

「この私の身体は好きにできても、心まで自由に行けると思うなよ

！ ああ、どうしよう、どうしようカズマっ!! 予想外に燃えるシチュエーションだ！ 行きたくはない、行きたくはないが仕方ない！ギリギリまで抵抗してみるから邪魔はしないでくれ！ では、行ってくりゅー！」

「つてアホかい!?!」

興奮しながらノコノコとデュラハンに付いて行こうとするダクネスに、冷静さを取り戻した俺は、どこからともなく取り出したハリセンで引っ叩く。

「え、一体どこから取り出したんだ？」

「レツも宴会芸スキルを習得したのかしら？」

外野は黙つとれい。

「と、とにかく！ これに懲りたら俺の城に爆裂魔法を放つのは止めろ！ そして、紅魔の娘よ！ その二人の呪いを解いて欲しくば、俺の城に来るがいい！ ……だが、城には俺の配下のアンデッドナイト達がひしめいている。ひよっこ冒険者のお前達に、果たして俺の所まで辿り着くことができるかな？ クククククツ、クハハハハッ！」  
そう言つてデュラハンは哄笑しながら、黒い炎に包まれるとこの場から消え去つた。

何アレかっけえ、是非とも真似したいな！

「レツの目が輝いてるんですけど？」

「あのデュラハンの去り方がレツの琴線に触れたただけだろ」

だから外野は黙つとれい！



## 命のための闘い　　～VSアンデッドナイト～

あまりと言えばあんまりな展開に、集められた冒険者たちは呆然と立ち尽くしていた。

それは、俺も同じことだ。

俺の隣では、めぐみんが青い顔でわなわなと震え、杖をぎゅつと握り直す。

そして、一人で街の外へ出て行こうとする。

「おい、どこ行く気だ。何しようって言うんだよ」

「今回の事は私の責任です。ちよつと城まで行って、あのデユラハンに直接爆裂魔法ぶち込んで、ダクネスとレツの呪いを解かせてきます」

「……俺も行くに決まってるだろうが。お前一人じゃ、雑魚相手に魔法を使ってそれで終わっちゃうだろ。そもそも、俺も毎回一緒に行きながら、幹部の城だって気づかなかつたマヌケだしな」

俺の言葉にしばらく渋い表情を浮かべていためぐみんは、やがて諦めたように肩を落とした。

「……じゃあ、一緒に行きますか。でも相手はアンデッドナイトがひしめいているらしいです。となると、武器は聞きにくいですね。私の魔法の方が効果的なのはです。……なので、こんな時こそ私を頼りにしてくださいね」

そう言って、めぐみんは微かに笑みを浮かべた。

アンデットナイトって言うからには、鎧を着た相手なのだろう。

そんなのが相手では、安物の剣しか持たない俺は途端に無力になる。

だが、それならそれで考えがあった。

「俺の敵感知スキルで城内のモンスターを索敵しながら、潜伏スキルで隠れつつ、ここそ行こう。もしくは、毎日城に通って一階から順に、爆裂魔法で敵を倒して帰還。毎日地道に敵を削っていく。……」

一週間の期限があるなら、そんな作戦でいってもいい」

俺の提案に少しは希望が持てたのか、めぐみんが明るい表情で頷い

た。

俺とめぐみんはレッツとダクネスの方を振り返ると。

「おいダクネス、レッツ！ 呪いは何とかしてやるからな！ だから、安し……………あの二人はどこへ行つた？」

さつきまでダクネスとレッツがいた場所には既にあいつらはいなくなっており、アクアが呆然と古城の方を指差した。

「あの二人なら気分転換に散歩に行くって言つて街の中へ帰つていったわ」

「馬鹿野郎、なんで止めなかつた!？」

嫌な予感がして他の冒険者の人たちにも頼み、二人を探したがアクセルの街にあの二人はいなかった。

呪いを受けてしまった俺とダクネスは現在、ベルディアのいる古城の前に立っていた。

「行くのは俺一人でもいいって言つたのにな」

「レッツだけアンデッドナイトに蹂躪されるなんて羨まし…………許せないからな！」

おい、一瞬本音が出てるぞ？

「おいおい、今回なにをここに来たのか忘れたわけじゃないよな？」

「忘れてない。デュラハンの死の宣告を解いてもらうために、凄まじいハードコア変態プレイを要求されに行くんだらう？」

「完全に忘れてるな？」

お前もう帰れ。

俺たちがここに来た理由はベルディアの元まで辿り着き、今回のことをきちんとして謝罪して死の宣告を説いてもらうためだ。その為に一旦アクセルに帰つて菓子折りをかってきたつてのに、この変態の来たら……………!

「とにかく！ デュラハンの所に行くまでの作戦の確認をするぞ？」

「ああ、確かまずレッツがデュラハンの呼び出しているアンデッドナイト達を魔法で消しとばして、残った奴らを二人で対処する。だったな

？」

何故作戦は覚えていて、目的を忘れていたのか。

俺の人生の中で一番の謎だよ。

まあ、いいか。さっさと済ませてカズマ達を安心させてやろう。

俺はそう思いながら古城の扉を開けると、中から大量のアンデッドナイトが押し寄せてくる。

思った以上に数が多いな、少し時間がかかりそうだ。

「もう少し魔法の練習してから実践に導入したかったんだけど……。ま、ぶつつけ本番か。へインフェルノッ！」

俺がそう唱えると同時に俺たちを殺そうと襲いかかってきたアンデッドナイト達は、一瞬にして火ダルマとなり消えていった。

それでも魔法から逃れたアンデッドナイトはまだまだ数が多い。

あと三十体はいるか？

「ダクネス、頼んだ！」

「まかせろ、へデコイッ！」

ダクネスがスキルを使うと残ったアンデッドナイト達の標的がダクネスに向き、ダクネスに襲い掛かる。

そしてダクネスが耐えている間に俺が脳を潰すという寸法だ。

「へモードチェンジ・槍ッ！ はあッ！」

アンデッドナイトの脳を突くという単純な工程だが、結構な重労働だなこれは。俺が全てを倒すまでの間にダクネスがやられないか心配だ。

「ダクネス、大丈夫か!? 急いで片付けるから耐えてくれよ！」

「お構いなく！」

「本当にお前は平常運転だな、この野郎！」

「あと少しっ！ へモードチェンジ・刀、へ天宮流四ノ型十波ッ！  
………はあ、はあ、片付いたな」

それから約一時間。ようやく全てのアンデッドナイトを倒すことができ、今この城にいるのは俺とダクネス、そしてデュラハンのベルディアだけとなった。

「時間が掛かったな。もう帰ってレタス食いたい」

「あと、もう少しだぞレツ。ああ、堪能した」

ダクネスはボロボロになりながらもすぐいい笑顔を浮かべていた。その笑顔に俺を含めた大概の人はドキツとするだろうが、彼女の性癖を知っている俺はなんとも言えない気持ちになった。

まあ、それはさておき、いよいよベルディアとご対面だ。

だけどその前に少し疲れたから休もう。

〈五分後〉

「よし、準備は出来たな、ダクネス？」

「ああ問題ない。と言うか、私は休憩なんて必要なかったのだがな」

そう言わずにしつかり休めよ。肝心な時に体が動かなくなったら困るだろ？

そう言いながら城の最上階のドアを開けると、大剣を肩に担いだベルディアが待ち構えていた。

「来たぞベルディア！ さあ、どんなすごい要求でもするが良い！」

「少しは自重しろ！」

俺は再び、どこからともなく取り出したハリセンでダクネスの頭を引っ叩いた。

## 謝罪、そしてお説教

「……早いな。もう来たのか、赤眼の騎士に金髪の騎士よ。あの紅魔の娘はここに来たのか？」

「申し訳ないけど、流石に子供をこんな場所に連れてくるわけには行かないから。それに呪いを解くにはあの子の命と引き換えだとか言うんでしょ？」

「ほう？。俺の意図に気づいていたのか」

デュラハンのベルディアは値踏みするように俺たちを見つめる。

あまり気持ちの良いことではないな。

「おいレツ見ろ。あのデュラハンの舐め回すような視線を！ これから私にどんなすごい要求をしようと……」

「だから自重しろって！」

本当にこいつを連れてきたのは間違いだったのかもしれない。

ほら見ろよ、デュラハンの人も困ってるでしょうが。

「重ね重ね、うちのパーティーの者がすみません。あ、これは魔王城へ帰還したあと、魔王軍の皆様で食べて下さい」

手に持っていた菓子折りをベルディアの前に行き手渡す。

ベルディアは若干戸惑いながらもそれを受け取り、俺に興味が湧いたかのように再び俺を見つめてくる。

「先程も思ったが、お前は本当に律儀だな。あの馬鹿な方の紅魔の娘がいなければ今頃こんなことにはならなかったというのに」

「約束通り、あなたの元まで辿り着けたので呪いを解いてもらっても？」

「……まあ、紅魔の娘はいなかったが、約束は約束だしな。ほら」

ベルディアが手をかざすと俺とダクネスから黒い瘴気が出てきてベルディアの手に収まった。

「ああー、なんて事だ！ これではすごい要求に従うことが出来ないではないかー！」

「貴様はさつきから一体なにを言ってるんだ!？」

「あー、この人ドMだから。気にしたら負けだと思う」

興奮したダクネスを必死に抑えながら諦めたように言うと、ベルディアは俺に対して五つの巻物を投げ渡してくる。

なんかの魔道具かと一瞬警戒したが、なにも起きないからこれらの巻物は安全な物だろう。

巻物を拾い上げて中身を見てみると文字がずらりと並んでいる。

「これはマジックスクロールか？」

「マジックスクロール？」

ダクネス曰く、マジックスクロールとはスキルが封印された巻物で、使うことでそれに封じられたスキルが一回だけ発動出来るらしい。

そしてこれは封じられていた、そのスキルを習得することの出来る、一級品質のマジックスクロールとのこと。

「呪いを掛けた詫びだ。これを持って帰るといい」

もしかして、このデュラハンとても良い人なのではないか？

「か、勘違いするな！これはお前に騎士としての可能性を感じただけであって、別にお前らにきちんと謝りたいなんて思っていないんだからね！」

ああ、ツンデレさんなのか。

じゃあ、この巻物はありがたく頂いていこう。俺は巻物を拾い上げて落とさないようにポケットに入れる。

「もう行け。お前らが散々アンデッドナイトを倒したせいで、俺はこの後また新たなアンデッドナイトを呼び出さないとならないのでな。ああ、あの紅魔の娘にはもうここに爆裂魔法を放つなどよく言い聞かせておくようにな」

「あ、ああ。本当に今回はご迷惑をおかけしました。ではめぐみんにはこの後きつーく言っておくんで。あと、マジックスクロール、ありがとうございました」

「ベルディア。今回はすまなかったな。次会うときこそは、ハードコア変態プレイを「わー！　わー！　わー！　わー！」

デュラハンにべこりと頭を下げて俺とダクネスは、城を後にした。ダクネスには後で道德の授業をしてやろう。

「レッツ！ ダクネス！ お前ら無事か!？」

「心配かけたなカズマ。私たちはこの通り大丈夫だ」

「むしろ、レベル上げをするいい機会だったよ」

アクセルのギルドに戻るとカズマ達がすごい勢いで駆けつけて来た。

心配をかけてしまったな。反省、反省。

そんな事を考えていると、突如めぐみんが涙を浮かべて

「ダクネスとレッツの馬鹿！ なぜ二人だけで行ったんですか!？ 私のせいで二人が死ぬなんて考えたくありません！ 私は使えませんか、そんなに私の爆裂魔法は使えませんか!？」

俺はダクネスにアイコンタクトを交わし、めぐみんに軽くチョップをかます。

「めぐみん。お前自分では知力高いって言ってるけど、実は馬鹿でしょ?。」

「な、なにを!？」

「確かにめぐみんがいれば、楽だっただろう。だが、ベルディアの元にとどり着いたところでどうなる？ きつと、私とレッツの命を人質に取られ、それはそれは激しいプレイを要求されるだろう!。」

あれ? さっきのアイコンタクト伝わってなかったのかな?

仕方ない、ダクネスには黙ってて頂こう。

「確かにダクネスの言った通り、めぐみんがいれば確実に攻略できただろうな。でも、たとえばベルディアのところへ行ってもベルディアはただでは呪いを解かない。何故かわかる?。」

「……分かりません」

「ベルディアはめぐみんの命と引き換えに、俺たちの呪いを解くつもりだったからだよ」

「っ!。」

めぐみんは握った手を胸に置き、青い顔をする。

めぐみんにとっては少し酷だろうが、分かってくれるためにはこうするしかないからな。

「だから、俺らだけで行つたんだ。俺たちだけで、礼を尽くして謝ればきつと許してくれると思つたから。そして実際許してもらつた。どうだ？ 俺たちはこの通り呪いを解いて貰えたよ？」

「アクアの曇りなき眼（自称）によると俺とダクネスからは全く呪いを感じないと言っている。実際はそれを聞いて本当に安心した。俺も一度死んだ命とはいえ、まだ生きていたいから。」

「今回はいい勉強になつたでしょ？ 所構わず爆裂魔法を撃てば誰が迷惑してしまうのか、その短気な性格がどのような結果をもたらすのか。今すぐとは言わないから、俺たちと一緒に少しずつ直して行く。な？」

「……………は、はい。…………ぐす。…………本当にごめんなさい！ レツ、ダクネス！」

とうとう堪えられなくなったのか、めぐみんは泣き出してしまった。そしてそんなめぐみんをアクアとダクネスが優しく頭を撫でる。

うーん、なんとも微笑ましい光景。良きかな良きかな。

そんな事を考えているとカズマがこつちに来る。

「今まで、その顔と言葉でいろんな女の子を落としてきたんだな」

なんて人間きの悪い事を。

「おいおい、俺の顔はカッコいいというよりかわいいだろ？」

「まあ、中性的な顔つきだからな。にしても、自分でかわいいって言うのな」

「へ第一次桜才学園。女装が似合う男子生徒選手権」でぶっちぎりの一位を取つてから、俺は諦めた」

「なんか、悪かった」

そう言えば、卒業してから先輩方に挨拶とかしてなかったな。津田先輩やスズ先輩元気かな？

シノ先輩とアリア先輩には半強制的に女装させられた思い出しかないから、結構複雑なんだけど。

まあ、それはさておき……………

「さつきから動きっぱなしで、凄く腹減つた！ すみません、カエル肉の唐揚げとキャベツと玉ねぎのサラダ、そして黒パン下さい！」



「いや、どんだけ食うんだよ!？」

## クエストを探した

俺とダクネスがデユラハンの城へ謝罪しに行ってから、一週間が過ぎた。

本当に呪いが解けているのかという不安がありながらも、ベルディアに呪いを掛けられた時刻になるが、何も起こらない事で心から安堵していたとき

「クエストよ！ キツくてもいいから、クエストを請けましょう！」

「「えー……」」

突然そんな事を言い出したアクアに、俺とカズマとめぐみんは不満の声を上げた。

アクアを除いて、俺たちの懐は潤っている。

それに俺は何もない日は基本バイトをするようにしているから、別にクエストを請けなくても食べてはいける。

今日は、せっかく取った休日なのに何故クエストに行かなければならないのか。

「私は構わないが。……だが、アクアと私では火力不足だろう。せめてレッツにやる気があれば……」

「ごめん、今日はせっかくの休日なんだ。それにベルディアの城攻略から筋肉痛が酷くてさ」

「いや。お前しばらくバイト休んで、ゆっくりしろよ！ 筋肉痛なのに肉体労働のバイトしてたのか!!」

乗り気じゃない俺たちを見て、いよいよアクアが泣き出した。

「お、お願いよおおお！ もうバイトばかりするのは嫌なのよお！ コロッケが売れ残ると店長が怒るの！ 頑張るから！ 今回は、私、全力で頑張るからああっ！」

「いやいや、冒険者活動を自粛しないとイケない今、冒険者にできる事はバイトくらいでしょ？」

現に俺だって昨日まではバイトで汗を流していたというのに……。

「しょうがねえなあ……。それで、どんなクエストを受けるつもりなんだ？」

カズマのその言葉に先ほどまでの涙は何処へやら、ころつと得意そうな表情にして一枚の依頼書を取り出した。

なになに、『ーマンティコアとグリフォンの討伐ーマンティコアとグリフォンが縄張り争いをしている場所があります。放っておくと大変危険なので、二匹まとめて討伐してください。報酬は五十万エリス』？

「アホかー！」

カズマが叫ぶと、その依頼書を元の場所に貼り直した。

なんてもん受けようとしてるんだ。アクア、俺を56す気か？

「何よもう、二匹まとまってる所にめぐみんが爆裂魔法食らわせれば一撃じゃないの。それに、もし見つかってもレツさんがなんとかしてくれるわよ。つたくしよすがないわねー……」

「お前さっきの話聞いてた!? レツは今、筋肉痛なんだぞ。碌に剣震えるわけねえじゃねえか！ って言うかそれ以前にレツが可愛そうだわ!!」

……………。

「ねえ、アクア。短時間で数万エリスくらい稼げる方法があるんだけど」

「え、なにになに？ レツったらそんな方法があるなら早く教えなさいよ」

俺のその言葉にアクアは嬉々として食い付いてくる。

「いい？ まず、このギルドの真ん中で露出の激しい服を着て暇を潰すんだ。そしたら中年の冒険者が「五万エリスでどう？」とか行ってくるから、後はそれについて言っつてその人に従えば……」

「なあ、レツ！ それって売春だよな!? なんて事させようとしてんだよ!!」

見るとダクネスとめぐみんがこれでもかと言うほどにドン引きしている。あれ、俺今おかしいこと言っつたっけ？

俺の通ってた高校の英語科の先生は、お金の困ったら迷わずそれを実行すると思うんだけど……」

「あんたに期待した私が馬鹿だったわ！ ……ん？ ちよつと、これ

これ！ これ、見なさいよっ!!」

アクアが持つてきた依頼書に目を通す。

なになに、『湖の浄化―街の水源の一つの、湖の性質が悪くなり、ブルータルアリゲーターが住み着き始めたので水の浄化を依頼したい。湖の浄化ができればモンスターは生息地を他に移すため、モンスター討伐はしなくてもいい。※要浄化魔法習得済みのプリースト。報酬は三十万エリス』？

「……お前、水の浄化なんてできるのか？」

カズマの疑問にアクアがふつと鼻で笑う。

「バカね、私をだれだと思ってるの？ と言うか、名前や外見のイメージで、私が何を司る女神かぐらい分かるでしょう？」

「宴会芸の神様だろ？」

「違うわよヒキニート！ 水よ！ この美しい瞳とこの髪が見えないのっ!!」

なるほど。カズマはヒキニートだったのか。

それはいけないな。桜才学園生徒会長、天宮烈の名にかけて更生してくれる!!

「なんかレツの目がより赤く輝いているんだが……？」

「紅魔族は気分が高揚すると目がより赤くなるんですよ」

紅魔族じゃねえよ。

街から少し離れた所にある大きな湖。

湖の水は濁り、淀んでいる。

汚れないように事前に対策をしておけばよかったのに、こう言う所について異世界は適当だな。

俺たちが湖を眺めていると、背後から不安そうなアクアに声をかけられる。

「……ねえ……。本当にやるの？ ……私、今から売られていく、捕まった希少モンスターの気分なんですけど……」

鋼鉄製のオリの中央で、体育座りをしながら。

湖を浄化するにあたって、カズマが立てた作戦はこうだ。

アクアを頑丈なオリに入れて、そこから湖を浄化していく。これならモンスターが邪魔をしようとも、オリがアクアを守ってくれる。

みんなで力を合わせて、アクア入りのオリを湖に沈める。

よし、後は待っただけだ。

アクアが、膝を抱えながらぽつりと呟く。

「……私、ダシを取られてる紅茶のティーバックの気分なんですけど……」

## 新しいスキル

アクアを湖につけてから二時間が経過した。

今のところはモンスターが襲ってくる気配はない。

「そういえばレツ。君はベルディアからマジックスクロールをもらっていただろう。どんなスキルを習得したんだ？」

「ああ、こんなスキルだよ。へパワーライズ、はあ！」

俺はマジックスクロールで習得したスキルを唱えてから、近くにあった木に正拳突きを打ち込む。

このパワーライズは自身の攻撃力を跳ね上がるスキルだ。アクアもパワーードとか言う支援魔法は持っているみたいだが、任意のタイミングで発動できる方が断然良いから、習得できて嬉しかった。

「おお、木が凹んだ！ 凄いなそのスキル！」

「まだまだあるぞ。へデイフェンスライズ。ダクネス、殴ってみてくれ」

「え、いや。流石にそれは……」

ダクネスは乗り気では無いようなので、カズマに頼んで一発殴ってもらった。

がんっ！ と音を立てたが俺は全然痛くない。

デイフェンスライズは名前の通り、自身の防御力を跳ね上がるスキルなのだ。これもアクアが似た支援魔法を持っているが、任意のタイミングで発動できる方が（以下略）

「それは、私には必要のないスキルのようだ。まだあるのか？」

「後は、俊敏さを上げるへスピードライズ。器用さを上げるへテクニカルライズ。そして幸運を上げるへラッキーライズがあるよ」

「それは便利だな！ 魔力以外の全てを跳ね上げることが出来るのか！」

これがあれば、この先の闘いで有利に立てること間違い無しだ。それにこのスキルは、ルーンナイト、クルセイダー、ソードマスター、そして冒険者が習得可能なスキルだ。それなら……

「教えてあげるから、カズマとダクネスも習得したらどう？ スキル

ポイントもそんなにかからないし」

「おお、教えてくれるのか？ お前を仲間にして良かったよ、レッツ！」  
「いや、私は遠慮しておく。スキルポイントは全て防御に極振りするからな」

.....

「ダクネス、せめてテクニカルライズだけは習得しておいて。持つていて困るスキルじゃないから」

「な、なんで頭を下げる？ ベ、別にいいだろう。攻撃はレッツがするんだから。.....わ、わかった。習得する、習得するから地面に頭を擦り付けてまで頼み込まないでくれ!!」

「おーいアクア！ 浄化の方はどんなもんだ？ 湖に浸かりっぱなしだと冷えるだろ。トイレ行きたくなったら言えよ？ オリから出してやるからー!!」

遠くから叫ぶカズマに、アクアが叫び返した。

「浄化の方は順調よ！ 後、トイレはいいわよ！ アークプリーストはトイレなんて行かないし!!」

昔のアイドルか？

まだまだ余裕そうなアクアを見て、カズマはオリのカギを再び懐にしまう。

「何だか大丈夫そうですね。ちなみに、紅魔族もトイレなんて行きませんから」

.....

「てことは、今までトイレへ行ってたのって割れ目をいじる為？ いや、くらなんでも思春期すぎない?」

「嘘ですごめんなさい！ トイレへ行かないなんて嘘をつきました。謝るのでこれ以上言わないでください!」

.....ここに来て、アリア先輩のボケが使えるとは。世の中何が起こるかわからないね。

「私もクルセイダーだから、トイレは行かないぞ。だからレッツ、私にもめぐみんみたいな羞恥責めをつ!! さあ、どうした？ 遠慮なく言っ

てくれて構わないぞ?」

「……………何やってんだよレツ。状況悪化したじゃねえか」

「本当にすみませんでしたー!」

ここにきてダクネスがボケを入れるとは……………!

やはり俺はツツコミ担当か。くそう!!

「そ、それにしても! ブルータルアリゲーター、来ませんね。このまま何事もなく終わってくれればいいのですが」

恥ずかしさのあまり話題を変えたためぐみんが、フラグとしか思えない様な事を言った。

そして、それをきっかけにでもするかの様に、湖の一部に小波が走る。

「カ、カズマー! なんか来た! ねえ、なんかいつぱい来たわ!」

へえ、この世界のワニって群れで行動するんだ。勉強になったなー

ー浄化を始めて四時間経過ー

「ギシギシいってる! ミシミシいってる! オリが変な音立ててるんですけど!」

「あのオリの中、ちよつとだけ楽しそうだな……………」

……………。

「なあ、カズマ。このワニたちを倒してもいいか?」

ダクネスが暴走する前に行動することにした俺は、カズマに出撃許可を取る。

「別にいいけどお前、今筋肉痛だろ?」

「動かなければいいんだ。へモードチェンジ・二丁拳銃へテクニカルライズ。さあ、レッツ、シューティング!」

「ああ、デュランダルって銃にもなるのな。くそ、俺はなんでアクアを連れてきてしまったんだ……………!!」

カズマが頭を抱えて嘆き後悔する中、俺はワニの頭を狙って引き金を引いていく。

器用度が上がっているおかげでワニの頭に百発百中である。

よし、この調子でどんどん倒して行こう。

「アクア! 俺がワニを倒していくから、浄化を集中してくれ!」



「わ、分かったわ！　へピュリファイケーション！　へピュリファイケーション！　へピュリファイケーション！　へピュリファイケーション！　へピュリファイケーション！」

それにしても数が多いな。流石に俺一人では倒しきれないか？  
そんな事を考えているとダクネスがオリの方へ走っていく。

「仲間を守るのがクルセイダーの誇りだ！　さあ、私が相手だ!!」

「ダクネス！　さっき教えたテクニカルライズを使って！　右側のワニ達をお願い!!」

「任せろ。へテクニカルライズ。はあ！　やあ！　……………ふふ、はははは！　当たる！　これは凄い当たるぞ!!」

よし、ダクネスが助っ人に付いてくれるならこっちも楽だな。

この調子でガンガンいくぞ！

結果：アクアは無事湖の浄化を終え、俺たちはワニを大量に討伐したおかげで暫くはお金に困らなそうだ。

ナルシストを倒した。(カズマが)

湖の浄化を終えた俺たちは、今回の報酬に期待しながらアクセルの街へ帰還した。

「……おいアクア、街に着いたからいい加減オリから出て来いよ」

「えー、別にいいじゃない。ギルドまで運びなさいよ」

呆れながら言ったカズマにアクアはやる気のない声で言う。オリの中で寝っ転がりながら。

歩いて帰ることを面倒くさがったアクアの我儘を聞いて、アクアをオリに入れたまま、馬で引いて帰ってきたのだ。

そしてその事を俺たちは心から後悔する事になる。

「め、女神様っ!?! 女神様じゃないですかっ! 何をしているんですか、そんな所で!」

突然叫んで、オリで悠々自適にごろごろしているアクアに駆け寄り、鉄格子を掴む爽やか系のイケメン。

あろう事か、ブルータルアリゲーターの顎をも耐え切ったオリの鉄格子を、なんとも容易くグニヤリと捻じ曲げ、中のアクアに手を差し伸べた。

……………。

「……おい、私の仲間にも馴れ馴れしく触るな。貴様、何者だ?」

「……アクア、この人知り合い?」

アクアの手を取ろうとしたその男の肩を俺とダクネスが掴み、彼に詰め寄った。

男は俺とダクネスを一瞥すると、ため息を吐きながら首を振る。

いかにも、自分は厄介事には巻き込まれたくはないけど仕方ないと、いった感じで。

そんな彼の態度に苛つきを覚える俺たちの後ろで、もぞもぞとオリから出てきたアクアは、その男に対して首を傾げる。

「……あんた誰?」

「何言ってるんですか女神様! 僕です、御剣響夜ですよ! あなたに、魔剣グラムを頂いた!!」

ああ、なるほど。

この人は日本人なのか。

それで送り出したアクアはこの人の事を覚えていないのだろう。

「ああっ！ いたわね！ そんな人も！ ごめんね、すっかり忘れていたわ。だって結構な数の人を送ったし、忘れてたっけしようがないわよね！」

ほらね。

「ええっと、お久しぶりですアクア様。あなたに選ばれた勇者として、日々を頑張っていますよ。職業はソードマスター。レベルは37にまで上がりました。……ところで、アクア様はなぜここに？ というか、どうしてオリの中に閉じ込められていたんですか？」

「ああ、それはな……」

女神アクアがそこにいるという疑問にカズマが答える。

今までのことを懇切丁寧に。

「……バカな。ありえないそんな事！ 君は一体何を考えているんですか!? 女神様をこの世界に引き込んで!? しかも、今回のクエストではオリに閉じ込めて湖に浸けた!?!」

ミツルギに胸ぐらを掴まれるカズマ。そして、それを慌てて止めるアクア。

「ちよちよ、ちよつと!?! いや別に、私としては結構楽しい毎日送ってるし、ここに一緒に連れてこられた事は、もう気にしていないんだけどね？ それに、魔王を倒せば帰れるんだし！ 今日のクエストだって、怖かったけど結果的には誰も怪我せず無事完了したわけだし。しかも、クエスト報酬三十万よ三十万！」

「……アクア様、こんな男にどう丸め込まれたかは知りませんが、今のあなたの扱いは不当ですよ。そんな目に遭って、たった三十万……？ あなたは女神ですよ？ それがこんな……。ちなみに、今どこに寝泊まりしているんです？」

言いたい放題だね、この人。

三十万って日本の一ヶ月の給料よりも高いのに、三十万なめんな。ミツルギの言葉に、アクアが若干押されながらもおずおず答えた。

「え、えっと、みんなと一緒に、馬小屋に寝泊りしてるけど……」  
「貴様！」

ミツルギの、カズマの胸ぐらを掴む手に力が込められる。

「おい、いい加減その手を放せ。お前はさっきから何なのだ。カズマとは初対面のようなのだが、礼儀知らずにもほどがあるだろう」

「いい加減にしてくれないかな？ カズマだって困ってるでしょうが。親に人の胸ぐらを掴んじやいけませんって教えてもらわなかったの？」

エロボケを言うとき以外は物静かなダクネスも、この時は珍しく怒っている。

となりを見れば、めぐみんまでもが杖を構え、今にも爆裂魔法の詠唱を……。

「他の人の迷惑になるから止めようね？」

「……はい」

爆裂魔法の詠唱はなんとか俺が阻止した。

ミツルギはカズマから手を放すと、興味深そうに俺とダクネスとめぐみんを観察する。

「……クルセイダーにアークウイザード二人？ ……それに随分と綺麗な人達だな。君はパーティメンバーには恵まれているようだね。それなら尚更だよ。君は、アクア様やこんな優秀そうな人たちを馬小屋で寝泊まりさせて、恥ずかしいとは思わないのか？ さっきの話じゃ、就いている職業も、最弱職の冒険者らしいじゃないか」

冒険者なめんな。カズマは俺たちのミスを的確に対処してくれる優秀な司令塔だ。あと、俺はルーンナイトだ！

激しい憤りを感じる俺の横で、カズマがアクアに耳打ちをする。

「なあなあ、この世界の冒険者って馬小屋で寝泊りが基本だろ？ こいつ、なんでこんなに怒ってるんだ？」

「あれよ、彼には異世界への移住特典で魔剣をあげたから、そのおかげで、最初から高難易度クエストをバンバンこなしたりして、今までお金に困らなかつたんだと思うわ。……まあ、能力か装備を与えられた人間なんて、大体がそんな感じで、レッツさんみたいに私たちに合

わさせて馬小屋に寝泊りする人なんてそうそういないわよ」

……………。

「この際、俺一人でも高難易度クエストを受けて、お金渡そうか？」  
「それはレッツに悪いだろ？ 行くときはみんなで行こうぜ」

取り敢えず、生活の水準だけはカズマたちに合わせよう。うん。

だが、アクアの返答を聞くとても腹が立つ。

魔剣で苦勞せずに生きるのはまだいい。なにせ、俺も人のことを言える立場では無いから。

だけど、そんな奴に何故特典を持たないカズマがここまで上から目線で説教されないとイケないのか。

そんな俺の苛立ちの横で、ミツルギが同情するかの様に、アクアやダクネス、めぐみんに対して憐みの混じった表情で笑いかけた。

「君達、今まで苦勞したみたいだね。これからは、僕と一緒に来るといい。もちろん馬小屋なんかで寝かせないし、高級な装備品も買いそろえてあげよう。というか、パーティーの構成的にもバランスが取れていいじゃないか。ソードマスターの僕に、僕の仲間の戦士と、そしてクルセイダーのあなた。僕の仲間の盗賊と、アークウィザードのその子にアークプリーストのアクア様。まるであつらえたみたいになんかピツタリなパーティー構成じゃないか！」

俺とカズマが入っていないんだけど？

まあ、大方ハーレムを作りたいんだろうね。コトミ曰く、男子にとってハーレムを作ることはロマンらしいから。まあ、生徒会の仕事と姉と妹の世話で追われてた俺には縁のない話だったけど。

「ちよつと、ヤバいんですけど。あの人本気で、ひくぐらいヤバいんですけど。ていうか勝手に話進めるしナルシストも入ってる系で、怖いんですけど」

「どうしよう、あの男はなんだか生理的に受けつけない。攻めるより受けるのが好きな私だが、あいつだけは何だか無性になぐりたいのだが」

「撃つていいですか？ あの苦勞知らずの、スカしたエリート顔に、爆裂魔法を撃つてもいいですか？」

「……………大不評だな。死ねイケメン」

「ねえカズマ？ そんな事言ったら俺も死ななくちやいけなくなるんだけど？」

「レツは女顔だからノーカンだノーカン。ウチのパーティーの優秀な攻撃手段なんだから死なないでくれよ？」

「認めてるとはいえ、他人に女顔って言われると悲しくなる……」

俺たちはもうミツルギを無視して、馬を引いてオリを引き、その場から立ち去ろうとした。

しかし、ミツルギはカズマの前に立ち塞がる。この分では通してくれないだろう。

「……………どいてくれますか？」

「悪いが、僕に魔剣という力を与えてくれたアクア様を、こんな境遇に放つてはおけない。君にはこの世界は救えない。魔王を倒すのはこの僕だ。アクア様は、僕と一緒に来た方が絶対がいい。……君は、この世界に持つてこられるモノとして、アクア様を選んだという事だよね？」

「……そーだよ」

この展開は昔読んだ漫画の展開だと……

「なら、僕と勝負しないか？ アクア様を、持つてこられる『者』として指定したんだらう？ 僕が勝ったらアクア様を譲ってくれ。君が勝ったら、なんでも一つ、言う事を聞こうじゃないか」

「よし乗った!! じゃあ行くぞー!」

やっぱり。

俺以上に我慢の限界がきていたカズマは、一も二もなく襲い掛かる。

右手で小剣を鞘ごと抜き取り殴りかかったのだ。

「えっ?! ちょっ! 待つ……!?!」

だが、流石は高レベル冒険者というべきか、慌てながらもバックステップで避けたミツルギは咄嗟に腰の魔剣を抜く。

それを見たカズマは口元をにやけさせながら、空いていた左手を突き出して……!

「ハステイル〜ツツツッ！」

おお、流石は幸運がカンストレベルのカズマさん。まさか一発で魔剣を奪うとは……………！

「ほい」

「え……………？ ガツ!?!」

魔剣の腹で頭を強打されたミツルギはなんともマヌケそうな顔で気絶してしまったとさ。

「卑怯者！ 卑怯者卑怯者卑怯者ーっ！」

「あんた最低！ 最低よ、この卑怯者！ 正々堂々と勝負しなさいよ！」

今までミツルギのことを見守ってたハーレム要員？ たちが突如として騒ぎ出す。

そんな彼女らを見無視してカズマは一方的に宣言した。

「俺の方ってことで。こいつ、負けたら何でも一つ言うこと聞かなくて言ってたな？ それじゃあ、この魔剣を貰っていきますね」

「なっ!? バ、バカ言ってるじゃないわよ！ それに、その魔剣はキョウヤにしか使いこなせないわ。魔剣は持ち主を選ぶのよ。既にその剣は、キョウヤを持ち主と認めたのよ？ あんたには、魔剣の加護の効果がないわ！」

カズマはアクアの方を振り向いた。

「…………マジで？ この戦利品、俺には使えないのか？ レツの武器は使えるのに？」

「マジです。残念だけど、魔剣グラムはあの痛い人専用よ。装備すると人の限界を超えた膂力が手に入り、石だろうが鉄だろうがサクリ斬れる魔剣だけど。カズマが使ったって普通の剣よ。それにレツさんの武器だって所有者であるレツがカズマ達に対して使用許可を出してるから使えるだけであって、レツさんの許可なしにはあの剣は使えないわ」

それはなんとも残念だが、剣としては使うことが出来るのか。

「じゃあな。そいつが起きたら、これはお前が持ちかけた勝負なんだ

から恨みっこ無しだつて言つていてくれ。……それじゃあアクア、ギルドに報告に行こうぜ」

それでも結局この剣を貰うことにしたカズマは、少女達にそれだけを言つて踵を返す。

だが、ミツルギのハーレム要因達は武器を構えた。

「ちよちよちよ、ちよつとあんた待ちなさいよっ！」

「キョウヤの魔剣、返して貰うわよ。こんな勝ち方、私達は認めない！」

……………。

「……えろ」

「「え？」」

「消えろ!! さもないと、お前らを緊縛してお前らの○○○と○○○に木刀を突き刺すぞ!!」

先程からの積もりに積もった怒りがついにキレてしまった俺はこのメス共に怒鳴る。

先程から黙つて聞いていれば、ミツルギにしてもこのメス共にしても好き放題言い過ぎだ。温和な俺でも流石に我慢の限界を超えて堪忍袋の尾が切れた!

「ひい!」

「以前先輩から借りた『SMシューティング』って本で、そう言った攻め方のやり方は知ってる! 手加減して貰えると思うなよ!」

「いやあああああっ!!」

俺の目を見て本気と確信したメス共は、違う意味での身の危険を感じ取ったのか、一目散に逃げて行つてしまった。

「うわあ……流石は数多くの変態を排出すると噂のある桜才学園の生徒会長。俺とはやることの次元が違う。……………つていうかマジで怖いんだけど?」

「……さ、流石の私でもそんな羞恥責めはされたくない。と言うか、レツの目がすごく怖いのだが?」

「震えが止まらないのですが……………? レツつて怒るとここまで怖いとは…………」



「怖いんですけど。ねえカズマ、レッツさんがすつごく怖いんですけど」  
俺に対して、軽くひいてる仲間の視線が痛い。

そんなことを思いながらカズマから魔剣グラムを取り上げ、数回素振りをする。………なるほど。

「なあカズマ?」

「ひい! 何でしょうかレッツさん!? お、俺に出来ることならなんなりと仰ってください!!」

「そんなに怖がらないでくれ、何もしないから。……言い値でいいからこの魔剣、俺に売ってくれない?」

## 怒りの鉄鎚　　＼ V S ミツルギ ＼

「な、何でよおおおおおっ!?!」

ギルドへ帰還した俺たちはクエストの完了報告を受けた。しかし、ミツルギが壊したオリの修理費が今回の俺たちの報酬から差し引かれるとのこと。

「だから、借りたオリは私が壊したんじゃないって言ってるでしょ!?! ミツルギって人がオリを捻じ曲げたんだってば!　それを、何で私が弁償しなきゃいけないのよ!」

しばらく粘っていたアクアだったが、やがて諦めたのか、少ない報酬を貰って泣きべそをかきながら俺たちのテーブルに戻ってきた。

「……今回の報酬、壊したオリのお金を引いて、十万エリスだって……。あのオリ、特別な金属と製法で作られているから、二十万もするんだってさ……」

しょんぼりとしているアクアに、俺たちは同情する。

今回湖の浄化を頑張ったのは他でもないアクアだ。それなのに何故こんな仕打ちを受けなければならぬのか。

とても見ていられなくなって、自分の財布からお金を取り出す。

「ねえ、アクア。今回俺が倒したブルータルアリゲータのお金、結構な額になったんだ。だから今回の弁償は俺がするよ?」

「え、ほんと?!　流石はレツさん。やっぱり持つべきものは仲間ね!　すみませーん、シユワシユワとカエル肉の唐揚げ下さーい!」

今回のクエストで五十万円エリスを稼ぐ事のできた俺は、アクアに二十万エリスを差し出してやった。

うんうん、やっぱりアクアはこのくらいが丁度いい。

……それにしても。

「なあカズマ、アクアってまさか本物の女神だったの?　今回俺半信半疑だったせいで、話にあんまりついて行けなかったんだけど」

「ああ、アクアは俺が転生特典として連れてきたぞ。っていうか話について行けてなかったんなら、なんでさっきブチ切れたんだよ?」

「ああ、それは……」

「ここにいたのかっ！ 探したぞ、佐藤和真！」

声のあつた、ギルドの入り口を見ると、さつきカズマに倒されたはずのミツルギが、取り巻きのメス共を連れて立っていた。

はあ、またか。

「佐藤和真！ 君の事は、ある盗賊の女の子かに聞いたらすぐに教えてくれたよ。ぱんつ脱がせ魔だつてね。他にも、女の子を粘液まみれにするのが趣味な男だとか、色々な人の噂になっていたよ。鬼畜のカズマだつてね」

「……ねえカズマ、俺のいない所で一体何やってるんだよ？ そこ座れ、指導してやる」

「おい待て、盗賊には心当たりあるが、その他について誰がそんな噂を広めたのか詳しく！」

必死にカズマが弁解する横で、アクアがミツルギの前にゆらりと立ち塞がる。

その目は怒りに燃えていて……………

「……アクア様。僕はこの男から魔剣を取り返し、必ず魔王を倒すと誓います。ですから……。ですからこの僕と、同じパーティー「ゴツドブロオオーツ!!」ぐぶえっ!!」

「あああっ!! キョウヤ！」

……やっぱり。

アクアに全力でぶん殴られて、ぶっ飛んだミツルギの胸ぐらを更にアクアが掴む。

「ちよつとあんたオリ壊したお金払いなさいよ！ おかげで私が弁償する事になったんだからね！ 三十万よ三十万、あのオリ特別な金属と製法で出来てるから高いんだつてさ！ ほら、さつさと払いなさいよっ！」

ミツルギは殴られたところを抑え、尻餅をついた体制で、アクアに気圧されながら素直に財布からお金を出す。

ミツルギからお金を受け取り、アクアは俺の前へやってくる。

「やっぱり、借りたお金は返すわね。ありがとね、貸してくれて」

そう言うときアクアはホクホクした顔で、運ばれてきたシュワシュワ

を片手にカエル肉の唐揚げを食べ始めた。

そんなアクアを気にしながら、カズマに悔しそうに言う。

「……あんなやり方でも、僕の負けは負けだ。そして何でも言う事を聞くと言った手前、こんな事を頼むのは虫がいいのも理解している。……だが、頼む！ 魔剣を返してはくれないか？ あれは君が持っているでも役に立たない物だ。君が使っても、そこらの剣よりは斬れる、その程度の威力でしか出ない。……どうだろう？ 剣が欲しいのなら、店で一番良い剣を買ってあげてもいい。……返してはくれないか？」

本人も言っているが本当に無視の良い話だなこれは。

自分の言った事にも責任が取れないとは……。

ミツルギに、めぐみんがクイクイとミツルギの袖を引く。

「……？ なにかな、お嬢ちゃん……、ん？」

ミツルギの注意を引いたためめぐみんは、そのままカズマを指で差し、その後今度は俺を指差した。

「……まず、この男が既に魔剣を持っていないのと、隣にいる彼が魔剣を持っている件について」

「!?」

言われてようやく気づいたミツルギはカズマに視線を戻す。

するとカズマは先ほど俺から受け取った、俺の一週間分のバイト代が入った袋を掲げて

「売った」

「買った」

俺もさつきカズマから買った魔剣を掲げて言うと、ミツルギは今度俺の前に立つ。

「……一応言っとくけど、俺個人としてはこの魔剣が普通に斬れるならばそれで十分だから、返す気はないよ？ とういか、カズマから買った時点でこれはもう俺の物だし」

「何故だ！ 君はあの男のやる事が許せないとは思わないのか!? あろう事か女神様をオりに閉じ込めて湖につけたり、女の子を粘液まみれにしたり……!」

俺は無言で立ち上がり、ミツルギを睨む。

それで怯むミツルギを前に口を開く。

「アクアをオリで運んだ事でお前に誤解をさせてしまった件については俺たちが悪い、謝罪しよう。だが、さっきから聞いていればお前やそこにいるお前のハーレム要因は随分と好き勝手言ってくれるな？

魔剣で今まで楽しんでたお前が好き勝手言える立場なのか？」

俺の眼力に気圧されたミツルギは押し黙る。だが俺はそんな事も気にせず続ける。

「それにアクセルの街では冒険者は馬小屋で寝泊りするのが常識だ。宿に泊まっているのだから、高収入の冒険者や俺やお前みたいに特典を貰った人だけだ。だが、そこにいるカズマは違う。アクアを連れてきた代わりに自分には何の能力もつかないからな」

「だが、女神様を連れて来たのなら、それ相応の待遇というものが……」

「ならばお前はこの剣無しでもアクアにこの世界に来た初日から、優遇してやる事が出来るんだな？」

俺の問いにミツルギは押し黙る。

それはそうだろう。こいつがこんな豪華そうな装備に身を包めているのだから、元はと言えばこの剣の力だからな。まあ、それは俺にも言える事なんだが……。

「それに挙げ句の果てには、カズマには明らかに不利な勝負で勝ったらアクアを譲れだど？ 明らかに自分にとって出来レースじゃねえか。そのメス二人もだ。カズマが褒められない勝ち方をしただけで卑怯者と罵りやがって」

そう、俺が一番許せないのはここだ。

明らかに不利になる勝負をしてカズマの転生特典であるアクアを強奪しようとした。俺はそんな不平等な勝負はしてはいけないと思う。命がかかっている時以外は正々堂々と勝負するべきだ。

「ねえ、レッツが怖いんですけど。まだ怒ってるのかしら？」

「レッツは仲間を大切にするので、アクアを連れて行くこうとしたあの男のことが余程許せなかったのでしょうか」

「だが、そろそろ止めた方が良いんじゃないか？ 見ろ、あの二人はもう涙目だぞ？」

後ろで不安そうにヒソヒソと囁き合う三人を軽く一瞥して、再びミツルギに向き直る。

「だけど、それでもまだ納得が行かないなら俺とタイマンで勝負しようじゃねえか？」

ギルドから少し移動した場所にある広場にて俺とミツルギは相對していた。

カズマ達や冒険者の人達も俺達の勝負が気になるのかついて来た様だ。

「ルールは各々が持つてる武器はなんでも使ってよし。ただし周りの迷惑になるので魔法とスキルの使用は禁止だ。この勝負で俺が勝つたらこのままこの魔剣は貰っていく。逆にお前が勝ったら魔剣を返還、そして俺の転生特典をお前にやる。売り飛ばすなり使うなり好きにしろ」

俺はデュランダル刀モードを取り出し、ミツルギに見せる。

それと同時に冒険者達から歓声上がる。

まあ、この剣は俺か貸した相手しか使えないから、売り飛ばすしかないだろうけど。

「待ってくれ、僕は武器を持っていない！」

ミツルギが焦ったように言う。

安心しろ、俺だって武器なしで戦わせるほどの鬼畜じゃない。

「ダクネス、両手剣貸してくれ」

「……なあレツ。やっぱり止めないか？ いくらなんでもこれはやり過ぎ」「はよ」「ひ、ひゃい……」

キツと睨みつけられて高揚したような顔をしているダクネスから剣を貸してもらい、ミツルギに渡す。

「これで武器の心配はないな。いつでもかかってきな」

「グラムは返してもらおうぞ、はあ！」

かなりの速さで振られてきた剣を後ろに飛んで避ける。

……やっぱり武器に頼りすぎてたか。速さはあるけどただの大振り技術が見られない。

だが、ミツルギはそんな事も気にせずに剣を振り続ける。

「やあー。せえいー! ぶえ!」

「隙だらけだ」

剣を避ける中で見つけた隙をつき、ミツルギの眉間を杖で殴りつける。

そして怯んだ一瞬でトツキー直伝の一本背負いをかけてやった。

「がは! で、でも……………え?」

「俺の勝ちだな」

背中を強打した痛みに顔を歪めながらもなんとか立ち上がろうとしたミツルギの首に、カズマから借りていたダガーを突きつけた。

それと同時に様子を見ていた冒険者達が歓声を上げる。

ミツルギは何が起こったか理解出来てなかったが、首に突きつけられたダガーを見て顔を青くしていた。

「お前のレベルは確か37だったか? 俺のレベルは15だ。どう言う意味か分かるな?」

「そ、そんな」

「キョウヤが……………負けるなんて」

首に突き付けていたダガーを離して、静かにドスの籠った声で言うてやる。

「今回俺は特典を使わずにお前に勝った。20以上のレベル差があるのだから。どれだけこの魔剣に頼ってたか丸わかりだな?」

「こ、こ、こんなことをして楽しいのか! 一方的に勝負を持ちかけて、特典を奪うのが楽しいのか!!」

「お前がカズマにした事をしただけですかなにか?」

俺の言葉に先程やった事の重大さによく気づいたミツルギは顔を真っ青にする。

俺はこれ見よがしに大きな声で言うてやる。

「なるほどなるほど! 女神様から頂いた特典を奪うのはお前だけの特権なんですね!! いやー、魔剣の勇者様は言うことが違いますな!!」

でも俺にはそんなこと知らないんで、この剣は貰って行きますね。それじゃあね、二度と俺の目の前に現れないでね!!」

『こいつ……鬼だ』

ミツルギのハーレムどもやカズマ達、挙げ句の果てには様子を見た冒険者達の声が辺りに響いていた。

「レッツ。今日はやり過ぎだぞ。お前ならベルディアの時のように話し合いで解決できたんじゃないか?」

その夜、カエル肉の唐揚げを頬張っていた俺に、ダクネスが呆れたように言ってきた。

「そうですよ。流石にさっきのにはあのミツなんとかさんに同情しました」

「俺もスカツとしたけど流石にあれはない」

カズマとめぐみんもダクネスと同意見らしい。アクアは……酔い潰れて寝てる。

俺は静かに口に入ってたものを果汁水で流し込み言う。

「ベルディアの時はどう考えても俺たちが悪かったし、きちんと許す機会を与えてくれたから穏便に話し合いで済ませられたよ。でもあいつはどうだった? 話を聞かずに勝てもしない勝負をカズマに挑んで、アクアを連れて行こうとした」

「勝ったけどな」

「なるほど。レッツにとって仲間を連れて行かれるのが許せなかったんだな」

「うん。お前と同じだよ、ダクネス」

あの時勝負を挑まずにただ、カズマを責めているだけならば話し合いで解決させていただろうな。

「それにあいつにぴったりの言葉がある。高校の先輩の名言なんだけど」

「ぴったりの言葉がですか」

「ああ。桜才学園、生徒会会則……その二十! 二兎追う者は……」

「一兎も得ずだろ?」



俺の言葉の先を読んだカズマが得意そうに言うが、俺はニヤリと笑って続ける。

「バニーガールさん達に嫌がられるぞピョン！」

一瞬の沈黙が走ったあと、カズマ達は笑い出した。

「なんだよそれ！ 真面目に答えた俺が馬鹿みたいにじゃねえか」

「真面目なトーンのあとにボケないで下さい」

「バニーガールとはなんだ？」

重くなつてた空気が一気に軽くなったのを見て、俺も自然と笑つた。

嫌な事ばかりじゃないよな。

まあそれよりも……。

「明日、筋肉痛酷くなるやつだ」

「いや、バイトを休んでゆっくりすれば済む話だろう？」